

Amazing アメイジング・エイズワンダー EIGHTH WONDER

Don't
meddle in
my
daughter!



DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

TAMAKIYA

Amazing EIGHTH WONDER

アメイジング・エイズワンダー

ウチのムスメに手を出すな!
公式同人誌

Don't
meddle in
my
daughter!

TAMAKIYA





エイズワンダーは
平和を勝ち取ったのだ

遂に終幕を迎えた。

電撃的和解によって
ブロウジヨブ首領ゼノビアとの

初代ワンダー・アテナと

悪の秘密結社ブロウジヨブの戦いは

エイズワンダーとヒロイン
母娘スーパーヒロイン



しかしこの地球を襲つた
災禍が去つた訳ではない

今この時も
新たな敵が
闇の奥から
宇宙の彼方から
次元の狭間から
人類に仇なさんと
その魔の手を
のばしているのだ

エイズワンダーの戦いは
今も続いてる。



クラクラ!



ウチの娘にそんな薄汚い物を
近づけたら許さないわよ!

待ちなさい!
このスケベ怪獣!



ママは
手を出さないで!



こんなヤツ…
私一人でだつて…



ママの力なんて
借りなくても

あたしは一人前に
やれるんだから！



クラッ...



知らないよーママと
違ってそんなとこ
ばっか見てないもん！

信じらんない！
ママのバカ！

H
!!



ね、クララ
このモンスター
何かおかしくない？

えっ、おかしで...
その...



すつごくおつきな
おちんちんついて
なかった？

はああ？



あのコつたら
すつかり
カリカリ
しちやつて

最近まともに
話も出来ないのよ



ハハハ
フケツくは
良かったわ

笑いごとじゃ
ないわよー



頭の中まで
エッチで一杯
なんでしょ！

クララ！

フケツ！



そりゃあ
反抗期ってヤツね

今更〜？

今まで独り占めして
来た大好きなママが
男に盗られちゃった
のよ？

実の父親
じゃない！

頭ではわかってても
納得はできない
んじゃない？



しかも毎晩
隣の部屋から
両親が
ハフンハフン
やりまくってる声が
聞こえて来るし

そんなに
大きな声
出してないわよ！

極力ボリューム
押さえて…



…って
クララの超感覚じゃ
全部筒抜けか…

ただでさえ
ケツペキな娘よ？
母親のそんな痴態を
目の当たりにしたら
「ママ、フケツ〜」位
いっわよ



は〜〜〜
まだまだ子供
だったのねえ

いーじゃない
もう少しくらい

それよりあたしの
留守中出動させ
ちゃつて悪かったわ
もう引退した
つてのに

いいのよ
ウチのダンナの
つきそいでしてくれて
るんだから

いやね…一度
キチンとした幹部
訓練受けさせよう
つてアメリカ支部の
N・U・D・E
アカデミーに連れて
来たけど

さすがね
あつという間に
他の候補生達を
追い抜いちゃった

どこまで能力が
進化するやら

彼が味方で
ホント良かったわ

…そう…
よかった

この分なら
そつ遠くない
うちにウチに
帰せるわ
そしたら思う存分
後ろからでも前から
でも思う存分パコパコ
やってちょうだいな

も~~~~~
やめてっ！

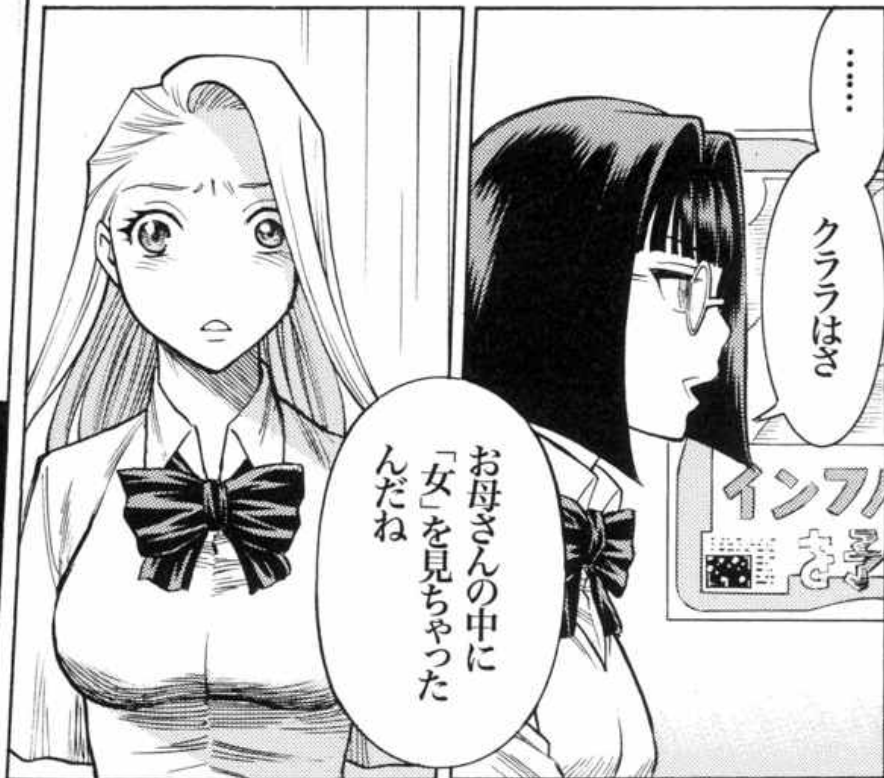
言わないで！
ますます
気分が悪く
なっちゃう

お薬
効き目ない？

なんかさあ
お腹の下の方が

ムカムカっていうか
ムズムズっていうか
スッキリしないんだ

…でっおばさまとは
まだ冷戦中なの？



クララはさ

お母さんの中に
「女」を見ちゃった
んだね

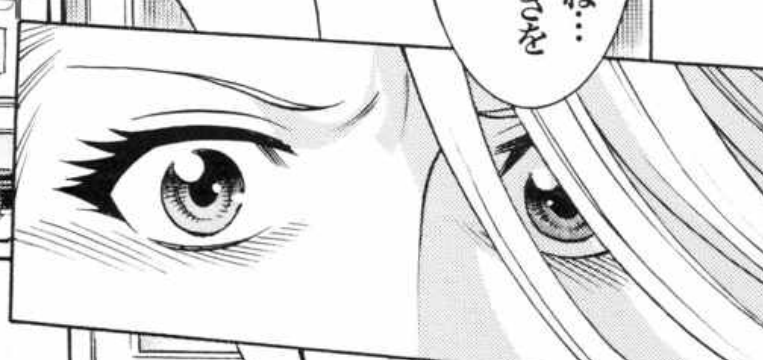


ね、この薬
飲んでみて

結構ショックだよね…
自分の親に生々しさを
感じちゃうと…さ

生理痛とかに
効くって…

クララ…？





んア……

はむう……



メイ……

いやあ



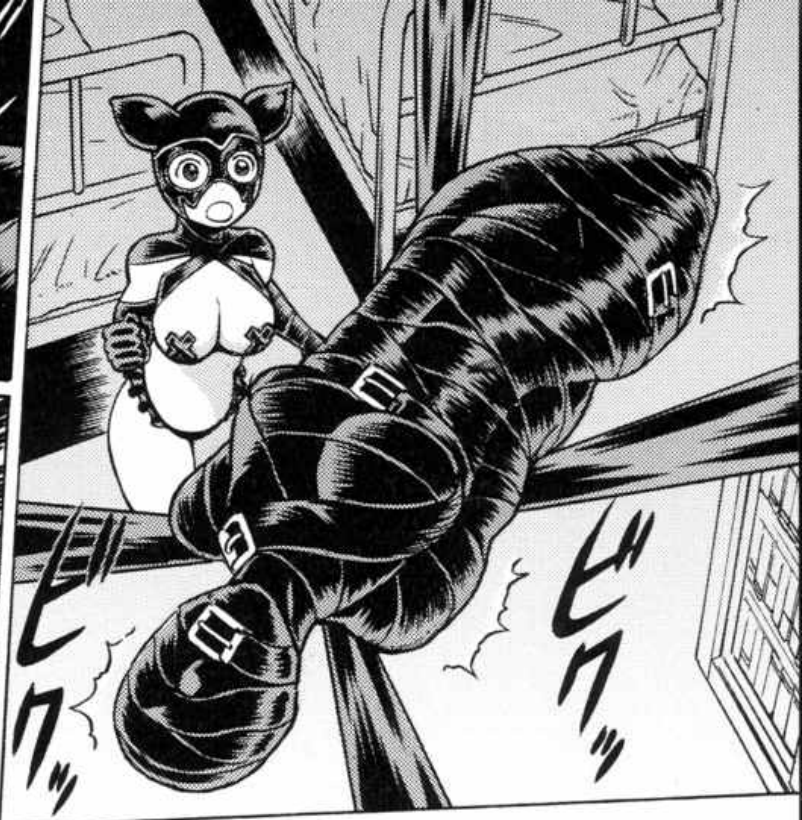
ヒッ
ヒッ
ヒッ



ダメ、クララ

こんな事……







クラクラ!

そんな……

まさか……





スキよお!

メイ、スキッ



あたし……
クララに……

クララに処女
捧げちゃったあ



あたしも

クララ
あたしも好きいい!



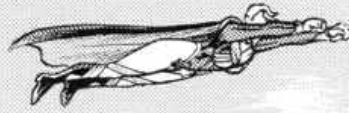


違う…

もっく

もっともっと
強い個体を…

クラクラ……



今から30分前
N・U・D・E本部と
一切の連絡が取れなく
なったわ!

異変を察し基地に
帰投したヒーローや
エージェント達も
音信が途絶!

転送システムが
ダウンしていて私は
すぐには戻れないの!

アテナ、残るは
あなただけなの

確かに我が家の
直通転送装置も
普通になつてたわ

この装置は
お客様の都合に
より現在
使用出来ません

え~~~~~

ただ事じゃ
ない!

……

破壊されている
様子はないわね



キサラ!

純ちゃん

リサちゃん



もう…ダメ

これ以上
突っ込まれたら…

おかしく
なっちゃ…



クララ?

堪忍…

クララ…





あう!

あうう



神よ・許したまえ

あひいいい

快楽に溺れる...う
罪深...い我がつ...身



あ……
ママア

あぶう

ゴウゴウ

エー
エー

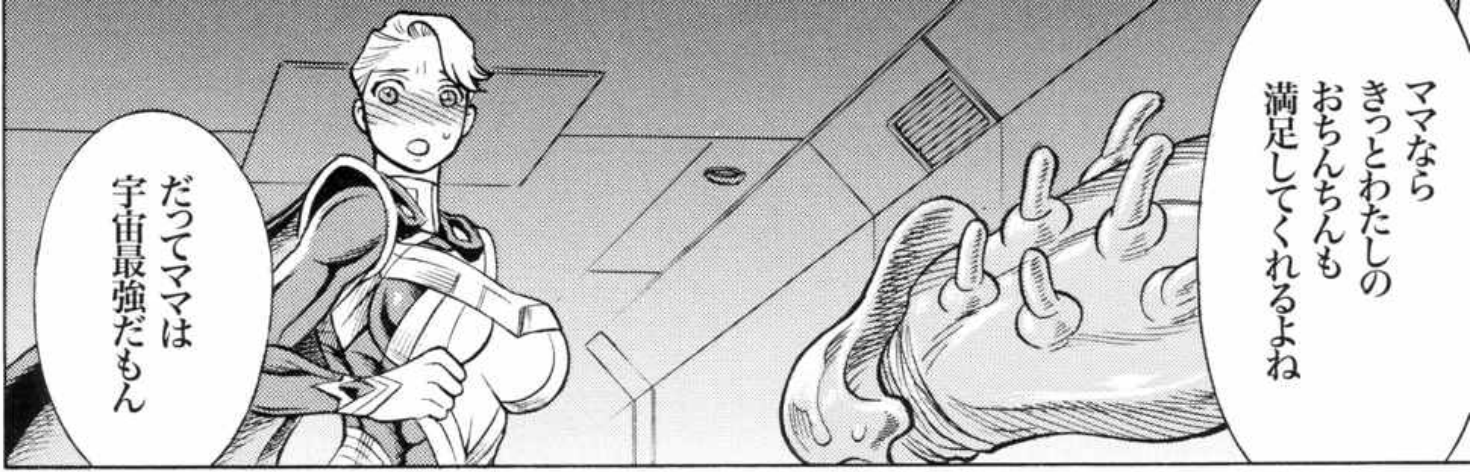
ふう
ふう
ブルブル

そーだ

これも
違う……
もいもいと
強い個体を……

ママがいる
じゃん

クラクラ!



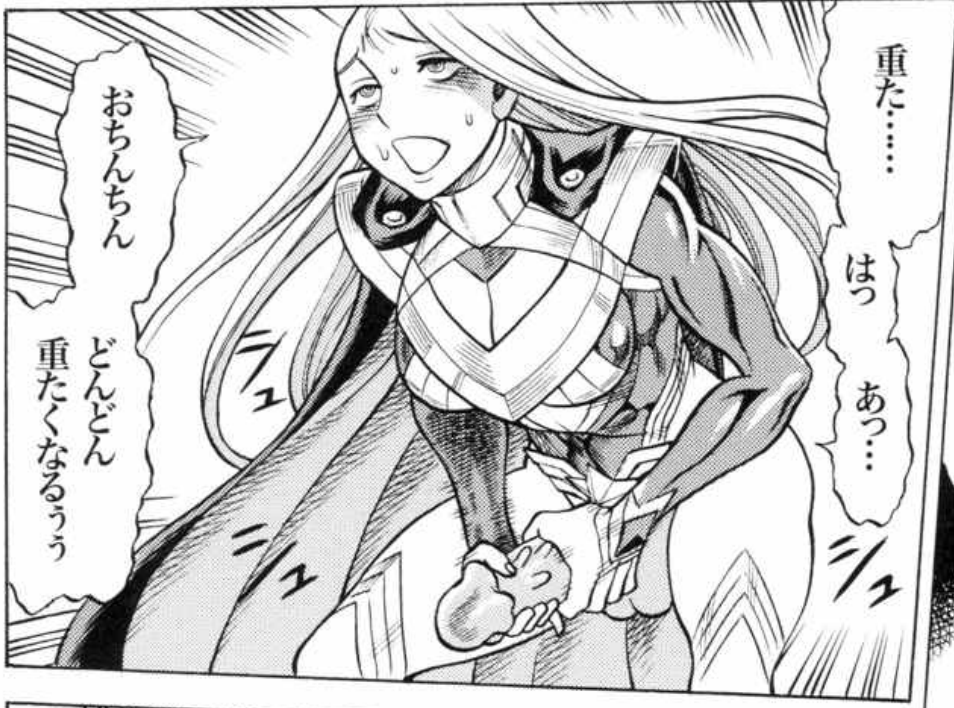
だってママは
宇宙最強だもん

ママなら
きつとわたしの
おちんちんも
満足してくれるよね



何故
クララに!

あれは
あのモンスターの
……



おちんちん

どんどん
重たくなるうう

重た……

はっ あっ……



あ、どしよ

ママにこれ突っ込む
って考えたら

すっごい
カチンカチン

カチンカチン
だよおお〜



それから
手を離さない!

クララ
やめて!







すっしょっ...

ママの
おクチ

温かくて
にゆるにゆるで

もっ

もつと強く
吸ってっ

バキュームしてっ



ちゅぽぽ

ちゅぽぽ

ちゅぽぽ





あん

ポッ



ママをあたしの「女」にしてあげる



あはは
ひどい顔

おちんちん
啜えて
トロトロ!

やっぱりママは
インバイだったんだ



ダメッダメよ
クラララ!

それだけは

ぶっぶっぶっ



そんな...

娘に...
犯されて...

はっ

はっ

はっ



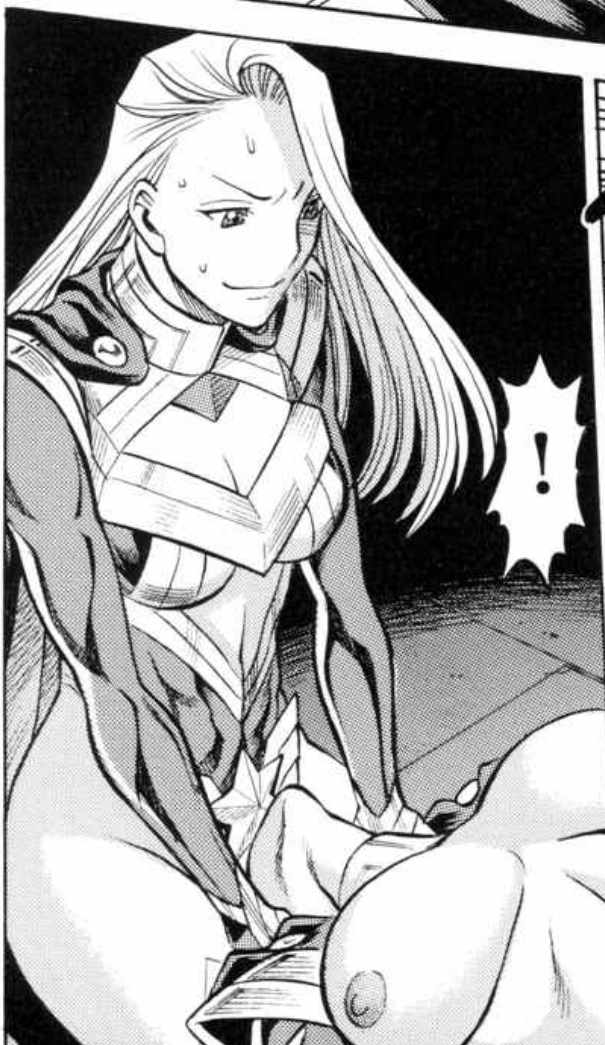
あはっ

あはっ!

ママの
おま……こ

気持ちい

ぎもぢぢ
いいいい



アハ



ももも

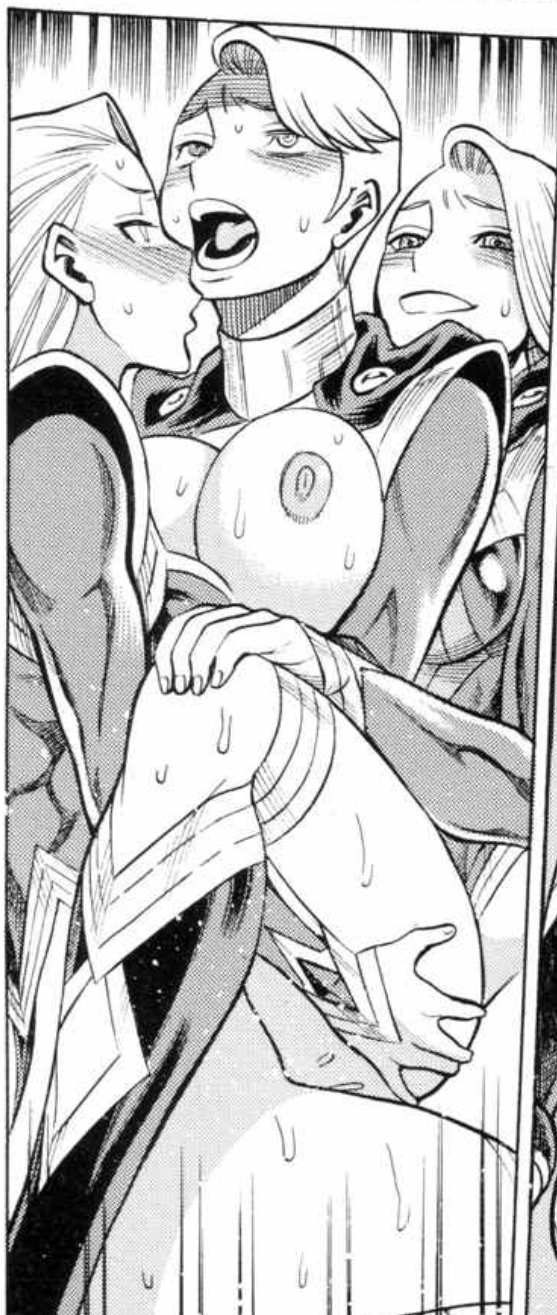
ももも

うほっ

一本じゃ
足りない!

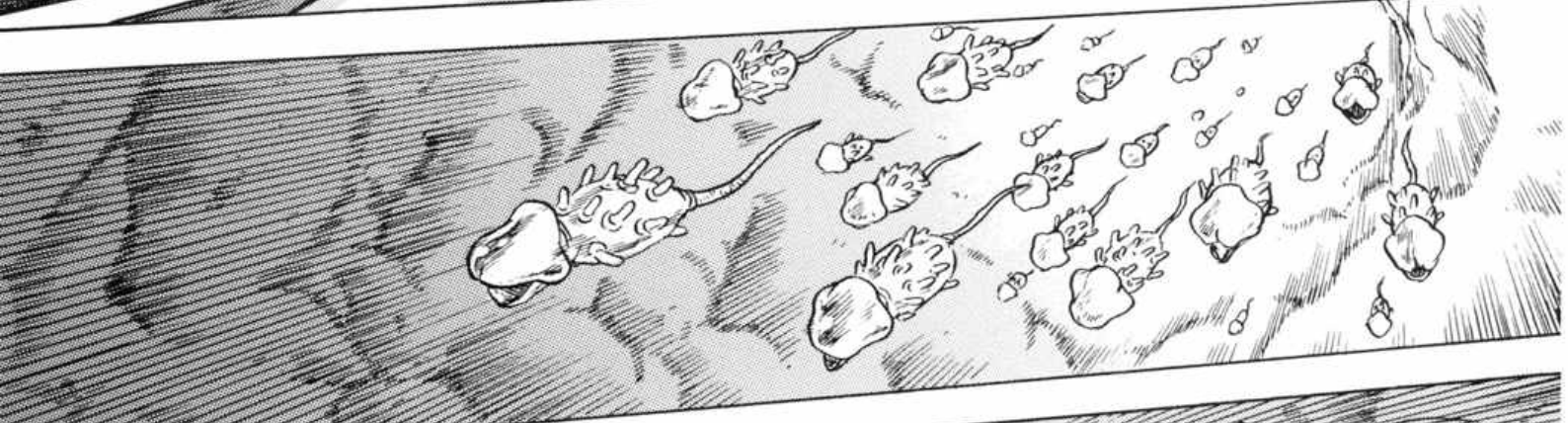
!

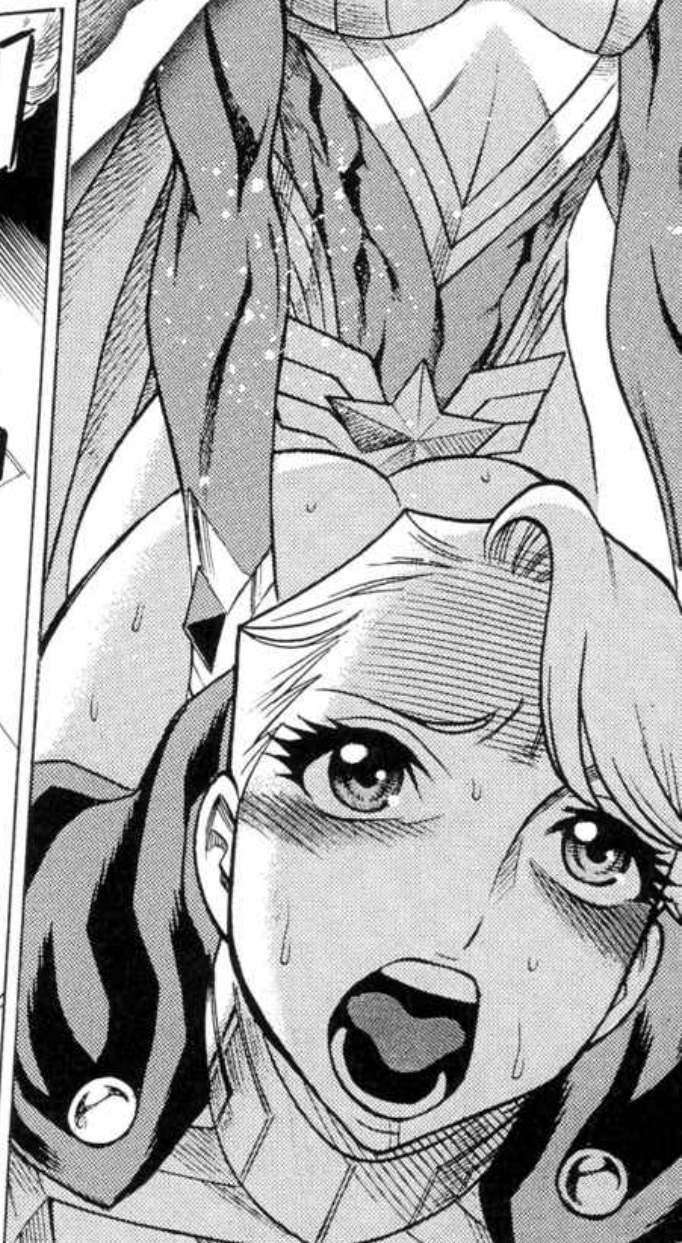












体の調子は
どう？

アレの正体：
Dr荒野が
調べてくれたわ

外宇宙から来た
寄生生命体だった
そうよ

単性生物でね
宿主を渡り歩いて
子孫を孕ませるに
ふさわしい雌体を
探す習性があるの

で、後はあなたの
知ってるとおり

最強の母体
エイズワンダーに
目を付けた辺り
なかなかだったけど

最初は
クララを狙ったけど
逆に宿主の肉体を
破壊されたんで、とっさに
あのコに乗り移った訳

PARASITE CREATURE

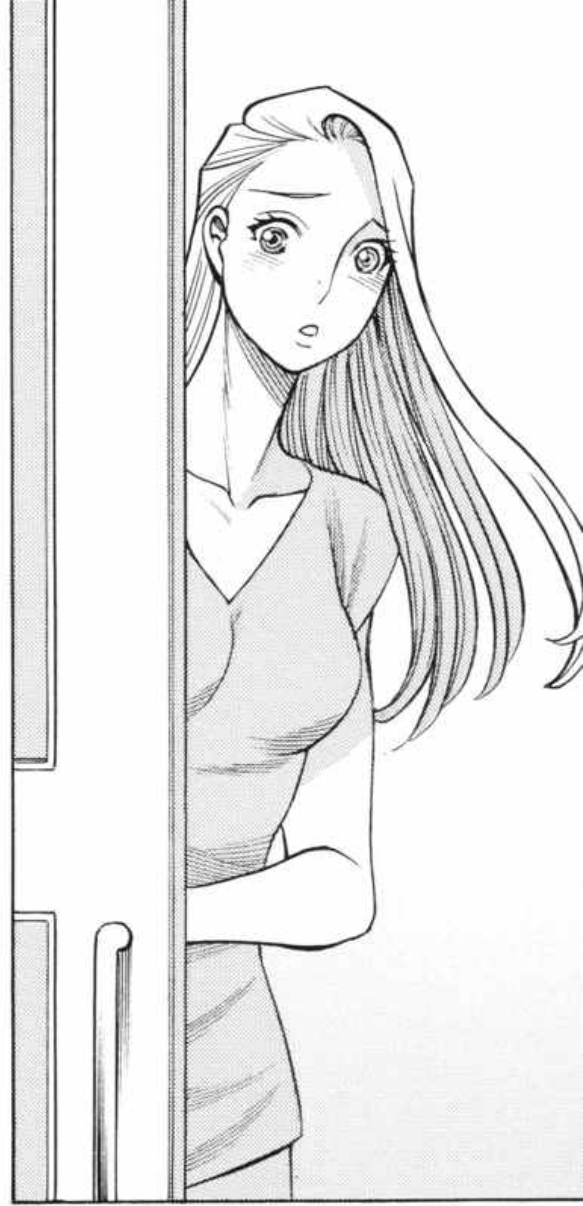
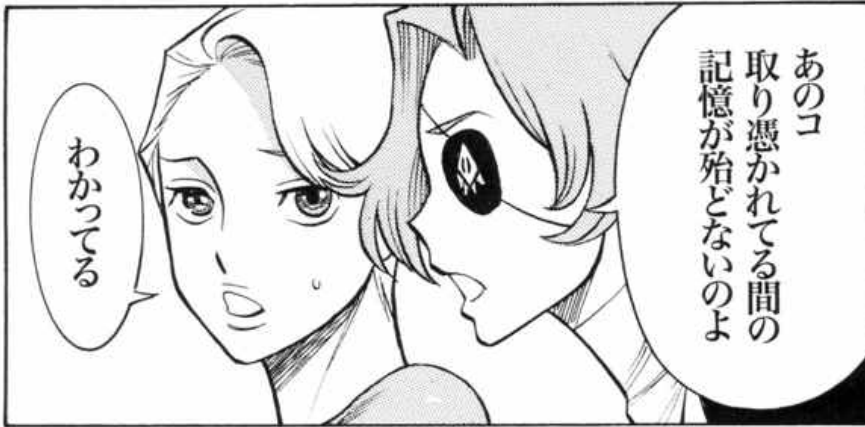
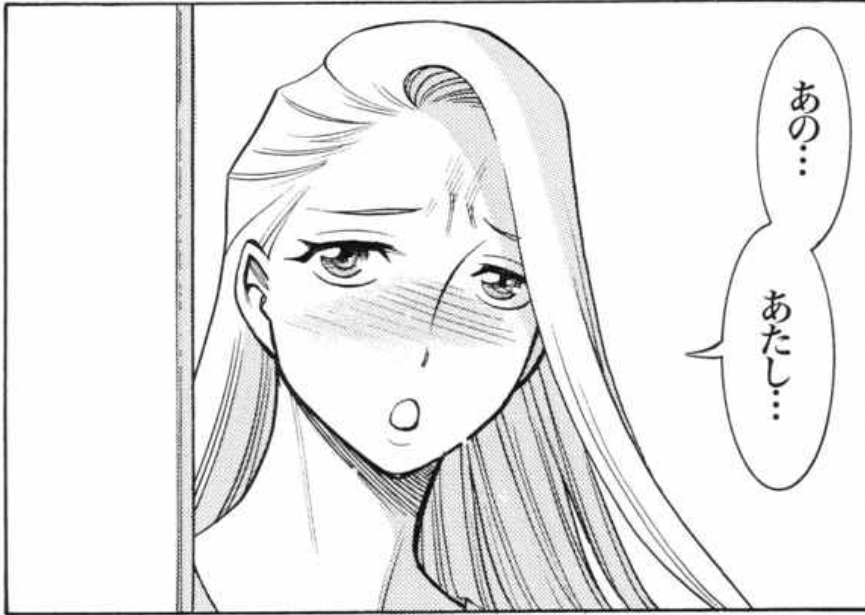
大丈夫！
基地の女の子達は？

みんな
ピンピンしてるよ

まさか
「先客」がいたとは
思わなかった
でしょうね

ママ……







こんにちは

お姉ちゃんだよ

おとうとかな

いもうとかな

早く会いたいな

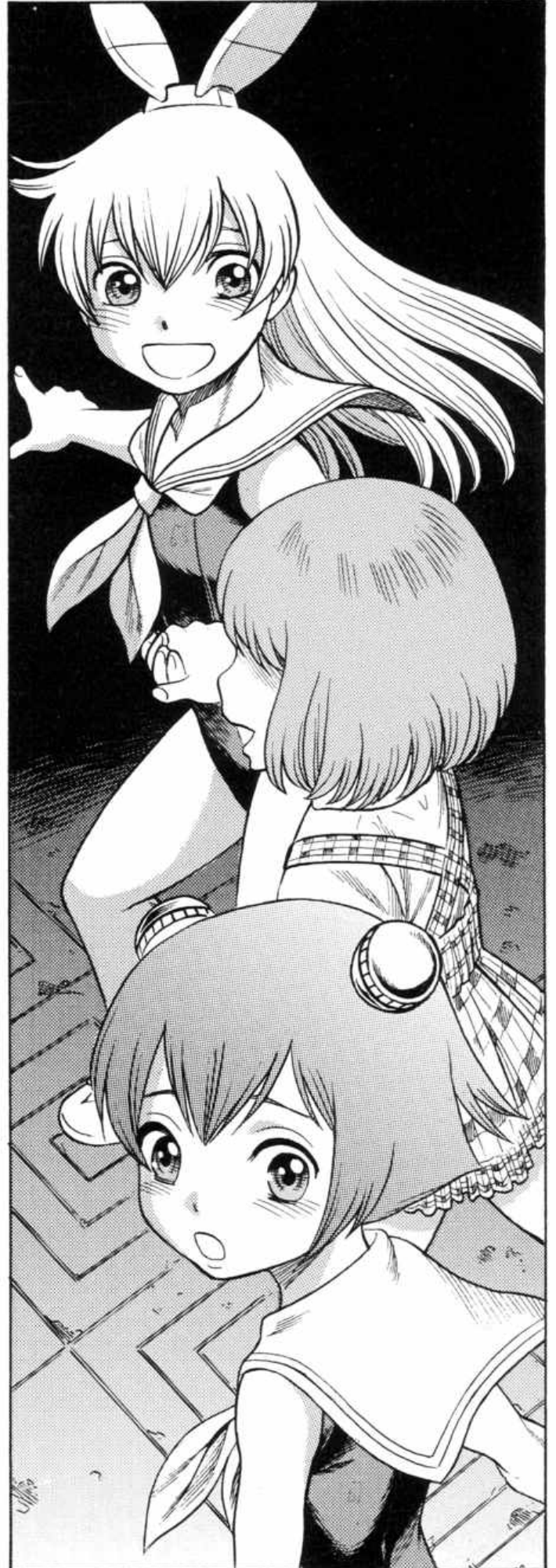
…透視して
確かめて良い？

まだ全然
わからないわよ

つていうか
そんなことしちゃ
楽しみがなく
なっちゃうでしょ

星に祈りを

ティクラクラン



木々が落とす影が次第に長くなってきた。幼い我が子を近くで遊ばせながら世間話に興じていた母親たちは、買い物や夕飯づくりのため自転車に子供たちを乗せて三々五々帰り始めていた。

昔前なら、入れ替わりに小学校帰りの子供たちが集まって野球やかくれんぼに熱中している時間帯だが、この公園では球技が禁止されているし、そもそも塾通いでここに来る時間すらない。一方、そこかしこのベンチには老人がぼつねんと座り、少なくなってきた子供たちが遊具で遊ぶ姿をぼんやりと眺めていた。

平日の遅い午後、ごくありふれた公園の風景だった。

カラフルに塗られた滑り台や、馬型やイルカ型のスプリング遊具が点在する遊具エリアの隅に、六つ一組のブランコがあった。

そのブランコの端の二つに、七、八歳の少女が二人並んで腰を下ろしていた。

「ステインガー様、遅いなあ」

「ねえゼッカちゃん、集合場所はここで合ってるんだよね」

一人は髪が長く、もう一人はショートカットで、お揃いのセーラー服に似たジャンプスーツを着ている。

「キッカも聞いてたでしょ、この公園で間違いないって」

ゼッカと呼ばれた髪の長い方は、カチューシャに付いたウサギの耳に似たデバイスを揺らしながら一心不乱にブランコを漕いでいる。

一方のキッカは心細げに肩をすぼめてブランコに座ったままだ。頭に二つ付いたお団子型のデバイスも縮こまっているように見える。

「もしかすると、来る時間間違えたのかなあ。またステインガー様に怒られちゃう……」キッカは今に

も泣きだしそうだった。

「大丈夫だってば。先に行って待ってろって言ったのはステインガー様だよ。ステインガー様が来るまでここで待つのが、あたしたちの任務なの！」

ゼッカは言い終わるや否やブランコから飛び降り、近くに立つ鉄柱の上にある時計を見上げた。「それにして遅いなあ」

ぶらぶら歩いて遊具エリアを出て行こうとするゼッカに、キッカが心配そうに声をかけた。

「あんまり遠くに行かない方がいいよ。ステインガー様がいつ来るかわかんないし」

「だーいじよーぶだって。ちゃんと見えるところにいるから」

遊具エリアの隣に藤棚があり、その下が小さな砂場になっていた。その砂場の中に、ゼッカたちよりやや年下と見える、小柄な女の子がうずくまっていた。

近くに親らしい大人の姿は見え、他の友達と遊ぶでもなく、少女は一人きりで黙々と砂をいじっていた。

好奇心をそそられたゼッカは、後ろ手を組んで忍び足でそっと少女に近づいていった。

アテナは大きく膨らんだエコバッグを両手に下げて公園に入った。エコバッグには牛乳や米袋、プロットコリーやエリンギといった、通りすがりのスーパーで買ったものがぎっしりと詰まっていた。普通の主婦ならいくら歩かないうちに投げ出してしまいたいような重さだったが、アテナは汗ひとつかかずに平然と手にぶら下げている。

買い物帰りに公園に立ち寄った主婦、という設定にリアリティを持たせるため、と自分に言い訳したものの、要するに普段は来ないスーパーで見つけたお買い得品を見過ごせなかっただけのことだった。
(気をつけて、アテナ) 耳の裏に装着した骨伝導通

信機がハンナ司令の声で囁いた。(相手がその気になつたら逃げ場はないわよ)

ハンナに言われるまでもなく、アテナの超感覚はしきりに警告を発していた。公園の中の一か所から絶え間なく風が吹きつけてくるような感触だった。ターゲットから『敵』と見なされずにどこまで近づけるか。

アテナは遊歩道を噛みしめるような足取りで、ゆつくりと公園の奥へ歩を進めた。樹木の葉がさわさわと風になびく音や、路面に揺れる木漏れ陽すら不吉に感じられた。アテナが感じる『風』の源までほんのわずかな距離を残すのみだった。

樹木のアーケードの下を伸びる遊歩道を抜けると、ゆつたりと空間を確保した広場があった。広場の隅に遊具類や藤棚が見える。

ターゲットは藤棚の下にいた。

アテナは相手を直視せず、それでいて絶えず視界の端に捉えながら手近なベンチを探した。ターゲットから二十メートルほど離れた場所にベンチを見つけ、エコバッグを置いて静かに腰を下ろした。ベンチと藤棚の間に木が植えられていて、うまい具合にターゲットから見えにくくなっている。

アテナはいかにも疲れて休憩している風情で、さりげなくバッグからペットボトルのジュースを取り出した。彼女は頸を上げてジュースを飲みながら、あらためてそっと相手を見た。

事前にターゲットのプロフィールを確認していたアテナに驚きはなかった。しかし、あの小さな女の子が八人もの人命を奪ったとはどうにも信じられなかった。内心ではそう思っただけのもの、彼女の超感覚は確かにあの少女がターゲットだと告げていた。

「位置に付いた」アテナがつぶやいた。

(了解)ハンナが答えた。(援護部隊はターゲットから最低一キロ以上の距離を置いて展開してる。狙撃

班の出番がないことを祈るわ)

「ついでに私の無事も祈って」

八人のNUDE隊員が相次いで失踪したと聞いた時、アテナは何かの冗談だと思った。その隊員たちはいずれも戦闘要員ではなく、適性のある人材を探して入隊を勧誘するスカウト班だったからだ。

一度はプロウジョブの関与が疑われたが、戦略的な必然性がなく具体的な動きも確認できなかったことから除外された。

残る可能性は、スカウト相手とのトラブルだった。

彼らがスカウトするのは普通の人間だけではない。潜在的な特殊能力を持つ者を見つけ出し、その能力をNUDEで開花させ世界のために役立てるよう勧めることもある。二代目エイズワンダーとなる前のクララに最初に接触したのも彼らだった。

彼らは強力かつ危険な能力を持つ相手の勧誘に失敗し、その能力で抹殺されてしまったのではないか。

問題は、相手の能力の「射程距離」がわからないことだった。失踪した八人は全く痕跡を残しておらず、うち四人は警戒厳重なはずのNUDE本部内で姿を消していた。もし相手が、スカウト班が属するNUDEそのものを敵と見なしたら、組織に属する者が上から下まで全員抹殺されかねない。

スカウト班が遺した資料が徹底的に調べあげられ、数百人の勧誘対象者から一人の人物が絞り込まれた。アテナに与えられた任務は、その人物と接触し、能力の正体を確かめ、NUDEが敵ではないと理解させることだった。

相手の能力が発動するトリガーがわからないため、偶然の出会いを装って徐々に距離を詰めていく作戦だった。ターゲットへの接触役として、子育てで幼い子供と接した経験が豊富なアテナが任命された。

八人は連れ去られて殺されたのか、それとも肉体を分解されたのか、どこか異空間に転送されたのか、何もわからない。百戦錬磨のアテナでも緊張せずに

はいられなかった。

「さて、どうしたものか……」

アテナが出方を考えているうちに、対象者に近づく小さな人影があった。その頭には奇妙なカチューシャが載っていた。

「あの子は……!」

ゼツカは少女のすぐ後ろまで近づき、少女の肩越しに覗き込んだ。

少女は砂で小さな城を作っていた。この年頃の子供が作るにはとても精緻で、デイズニーランドのシンデレラ城を模していることが一目でわかった。

いかに器用でも、シンデレラ城の細い尖塔を砂で再現するのはさすがに難しいらしく、少女が砂を細く積み上げるたびに倒れてしまう。

「砂をお水で濡らしたら、もつと高くできるよ」

少女はゼツカの声にはっとして振り向いた。

「手伝ってあげようか?」ゼツカが言った。

「やった!」少女は手を叩いて心底嬉しそうに笑った。「お星さまありがとう!」

「何のこと?」ゼツカは首を傾げた。

「お引越したばかりだから、新しいお友達欲しいなあって思ってたの」少女は答えた。「だから、あのお星さまにお祈りしたの」

少女は首をそらせ、頭上の一点を指差した。

ゼツカは少女が指さす方を見た。そこに星など見えず、ただ薄い筋雲がたなびく青空が広がるばかりだった。

「お星さまは昼間見えないでしょ?」

「ううん、あのお星さまは違うの」少女は首を振った。「朝も夜も、いつもあそこで光ってるの。お願いごとがある時は、あのお星さまにお祈りしたら叶えてくれるんだよ」

少女は屈託のない笑顔でスコップをゼツカに差し出した。

「あっちにもう一人いるから、ちよつと待ってね」

ゼツカはスコップを受け取り、ブランコの方を向いて声をあげた。

「キッカ!」

「ハンナ、非常事態よ!」アテナは小声でつぶやいた。

「先を越された」

「プロウジョブにもスカウト部門があったとはね」

ハンナが答えた。

あの少女に見覚えがあった。エイズワンダーなりきりコンテストが襲撃された事件で、プロウジョブの透明戦車を操っていた二人組の少女の片割れに違いない。名前をゼツカと聞いたか。

文字通り一触即発の状況だった。ゼツカが怪はずみな行動で少女のトリガーを引いてしまえば、彼女たちは即座に消されてしまう。かといって、自分が出て行って小競り合いを演じれば、警戒した少女はやはりトリガーを引いてしまうだろう。

アテナは為すすべもなくゼツカと少女のやりとりを見守るしかなかった。ゼツカはもう一人の少女を呼び寄せ、三人で砂の城を作り始めた。三人がかりだと格段にはかどりが、見る見るうちに大きなおとぎ話風の城が姿を見せ始めた。

その間も、少女からはただならぬ量のエネルギーが放射されていた。アテナのような超感覚の持ち主でなければ決して気づかないだろう。実際、ゼツカとキッカにはそのエネルギーに気圧された様子はない。

その超感覚がかえってアテナの注意を逸らす結果になった。

「多少の手違いはありましたが、今日は我々が先んじたようですね」

突然、アテナのすぐ背後から女の声が出た。

少女が発散するエネルギーが目くらましになり、自分の後ろに接近する気配に全く気づかなかった。

「アテナに振り向くことを許さない殺気が背中の中のしかなかった。手に持っていたジュースをベンチに置く隙さえ見つからない。」

「声の主が誰なのかはつきりしなかった。ただ、あの事件の時、レディ・デステインガーと名乗るヴィランが少女たちを指揮していた。後ろにいるのが彼女だったとしてもおかしくない。」

「あなたたちも目を付けていたとはね」アテナが前を向いたまま言った。そしてすぐに眉をひそめた。「今日は、ですって？」

「あの子を巡っては、既にあなたがたに二人も倒されています」背後の女は淡々と答えた。「あの子供をこのままあなたがたに渡すわけにはいきません」

アテナは眉をひそめた。あの少女に絡んでN U D Eがプロウジョブと交戦した事実はない。おそろく、スカウト班の動きから少女の存在を知ったプロウジョブがヴィランを差し向け、少女の能力を把握しないままトリガーを引いてしまったのだろう。それを彼女はN U D Eの仕業だと思込んでいる。

アテナはため息をついた。

「あの子の能力が何だか知ってるの？」

「あなた方がこれだけ手間をかける価値のある能力なのでしょう。私たちにはそれで充分です」背後の女は冷淡に言った。「あなたには、このままここで最後まで見ていただきます」

彼女が放つ殺気はこゆるぎもなかった。どうやら、ゼツカたちが少女の警戒心を解き、隙を見て拉致するつもりらしい。

「……こういう場合の優先順位は？」アテナは独り言に見せかけてハンナの見解を尋ねた。

アテナの頭蓋骨を伝ってきたハンナの答えは明確だった。

「……あの子をプロウジョブに渡さないで」

ゼツカたちと少女は砂遊びをするうちにすつかり

打ち解けていた。少女は話相手に飢えていたのか、ゼツカたちに問われるままにあれこれと話してくれた。

「ふーん、お母さんと二人で北海道から？」

「うん、お母さんはここで生まれたんだって。お父さんがいなくなっちゃったから、こっちに引っ越してきたの」

「なんでお父さんはいなくなっちゃったの？」

「急に遠いところにお仕事に行くことになって、少しの間会えなくなるって言われた」

「えー、それって……」キツカが言いかけてゼツカに制止された。

「でも、いいんだ」少女は砂にバケツの水を注ぎ、

一心不乱にこねていた。「お父さんがいなくなった後、お星さまがお空から見ててくれるようになったの。きつと、お父さんがあのお星さまを打ち上げてくれたんだよ。お父さんの代わりに、私を守ってくれるの」

ゼツカとキツカはあらためて空を仰ぎ見た。やはりそこには星など見えなかった。

アテナは超人的な聴覚で少女たちの会話をずっと聞いていた。

少女たち親子が北海道を引き払ったのは、八人のN U D E隊員が姿を消した直後だった。なぜか親子の周辺にいた誰も転居先を知らず、ターゲットの絞り込みが大幅に遅れる原因となった。

少女の父親は、勤務先の信用金庫で横領していたことが発覚し逮捕されていた。少女は事情を何も聞かされていないのだろう。

父親の退場が少女の能力を目覚めさせたのか、母子が転居したのは少女の能力がそうさせたのか、一連の出来事に因果関係があるのか定かではなかった。おそろく『お星さま』は現実には存在せず、少女の心が見せているのだろう。少女がお星さまに祈る

ことで能力が発動するに違いない。

今でも決して幸福とは言えない少女を、N U D E対プロウジョブの抗争に巻き込むのが正しいことなのか。少女のプロファイルを読んでからずつと、アテナの脳裏から迷いが消えることはなかった。

ただ、あの少女をプロウジョブに奪われてはならない。それだけはハンナと同意見だった。

「聞いて。正直言って、私たちはあの子を利用したいわけじゃない。それ以前に、あの子の能力が何なのか全くわからないの」アテナは少女を注視しながら背後の女に言った。「ただ、巨大で危険な能力だということ以外は」

「巨大で危険な力の持ち主は、我が方にも大勢います」背後の女が素っ気なく答えた。

「おそろく、あの子は自分の力をまだ理解できてない。あの力が暴走すれば、N U D Eもプロウジョブも関係なく滅ぼされる可能性がある」アテナは必死で言い募った。「あの子が穏やかな環境で静かに育てば、あの力をうまく制御できるようになるかもしれない。あの子に必要なのは『優しい世界』なのよ」

背中に伝わる女の気配が不意に一変した。冷たくはあるが平静だったのが、突然熱を帯びたように感じられた。

「優しい世界？」落ち着きのあった女の声は一転して猛毒を帯びていた。「そんなものがどこにあるのです。この世界の、一体どこに優しさがあるというのですか」

女の反応は異様だった。『優しい世界』という言葉がよほど気に障ったらしかった。

「よりにもよって、あなた方N U D Eに、優しい世界などと口にする資格はありません！」

女は急に黙り込んだ。そして再び口を開いた時には最初の冷静さが戻っていた。

「……相手は子供です。できれば静かな方法で、と思っていました。気が変わりました。今すぐ結論

を出しませう」

不穏な気配に思わずアテナが腰を上げようとした時、肩甲骨の間の皮膚に何か鋭いものが食い込んだ。その感触はアテナを抑え込むかのように強まり、彼女を再びベンチに座らせた。

「あなたが飛び立つよりも先に、これがあなたの胸を貫きます」背後の女が何かを背中突き付けているようだった。「さつきも申しあげた通り、あなたには最後までここに座って見てももらいます」

アテナの耳に、NUDEのオペレーターの緊迫した声が飛び込んできた。

「三方向から公園に高速で接近する飛翔体を確認！ いずれも飛行型のヴィランと思われます！」

水を含ませた砂は効果できめんで、少女一人で作っていた時よりもはるかに精密な仕上がりになっていた。

任務を気にしてためらいがちだったキツカも、いつの間にかすっかり乗り気になって城作りに参加していた。

「えー、じゃあ毎日ここで、お母さんのお仕事が終わるのを待ってる

の？」キツカが城のお濠を掘りながら訊ねた。

「うん。他に行くところないし」少女は水でこねた砂を尖塔の一つに積み上げ、塔の上に伸ばした。

「でも、一人ぼっちで待ってたら危なくない？ 悪い人にユークイされちゃうかもしれないよ」キツカが訊ねた。

「だーいじょーぶ。そういう時にはお星さまに守ってもらえるから」

「お星さまが？」ゼツカは首を傾げた。

少女は手を合わせ、空に向かって祈りをささげ始めた。

「お星さま、お星さま。きれいに輝くお星さま。あたしの祈りをかなえてください」少女は慣れた口調

で祈りの言葉をつぶやいた。「どうかあたしを守ってください。悪い人が近くに来ませんように。悪い人が来たらどこか遠くに行っちゃいますように。お願いします」

「いつもそんな風にお祈りしてるの？」ゼツカが訊ねた。

「うん。だから悪い人は来ないし、悪い人が来てもすぐいなくなっちゃうの。だから一人で遊んでも大丈夫なの」

「ふーん、そんなお星さまがあたしたちにも付いてくれたら、エイスワンダーなんかすぐやつつけちゃえるんだけどなあ」

「しーっ！」ゼツカが慌ててキツカの口を押えた。

アテナの失策だった。不用意に女を挑発して強硬手段に踏み切らせてしまった。彼女の頭蓋にハンナの鋭い声が響いた。

「狙撃班！ ターゲットを変更、各飛翔体を捕捉でき次第狙撃せよ！」

アテナの超感覚も既に察知していた。三人のヴィランがそれぞれ異なる方向から猛スピードでこの公園に接近しつつある。ゼツカたちに任せず、一瞬で空へ連れ去るつもりだろう。

たとえアテナが女を振り切って飛び立てたとしても、三人を同時に迎撃するのは無理だし、一人が少女をさらった後は二人がアテナを足止めして時間を稼ぐに違いない。

「スナイパーワン、狙撃失敗！ 速すぎて捕捉できません！」

「スナイパーツー、命中するも麻酔弾では効果なし！」

「スナイパースリー、進入角度悪く命中せず！」

いざという時に少女を無力化するために待機していた狙撃犯は、殺傷能力のある弾丸を装てんしていなかった。再装填の時間はもうないだろう。

「公園に到達するまであと六百メートル、五百メートル、四百メートル……」

オペレーターの声に合わせて、三方向から迫るヴィランの気配が高まっていく。猛然と接近する一人の姿がアテナの視界に入ってきた。

ヴィランたちが公園に到達したら、いちかばちか飛び出していくしかない。背後の女をどうするかは考えないことにした。

「……二百メートル……」

アテナは背中感触にかまわず立ち上がった。次の瞬間。

正面から突風が吹きつけ、アテナはベンチに尻餅をついた。

舞い上がった砂塵がアテナの顔を激しく打った。

砂が入った目を無理やりこじ開け、アテナは藤棚の方を見た。

砂場の少女たちが城を突風に崩されたと言って騒いでいる。

公園に降り立っているはずのヴィランたちはどこにもいなかった。

アテナは空を仰いだ。

つい先ほどまでの緊迫した状況など忘れたかのようになり、平穏な青空を白い雲が緩やかにたなびいていた。

「飛翔体が……三つとも消滅しました」オペレーターのかすれ声が聞こえた。

「アテナ、どうなってるの？ ヴィランはどこに行ったの？」

アテナはハンナの声を聞き流し、あらためて砂場を見た。

少女は顔についた砂をしきりに拭いていた。

ヴィランたちは何の痕跡も残さずに消えた。少女の能力が発揮されるところを初めて目の当たりにしたことになる。

背後の女は言葉を失って立ち尽くしていた。アテナ

ナの背中に突きつけられた固い感触はもうなかった。「これであなたたちの方は五人ね」アテナは言った。「NUDEはもう八人やられてるの」
ようやく事態を理解した背後の女が息を吸い込んだ。

不意の突風に崩された部分の修復がようやく終わった。これで城の本体はほぼ完成した。

「今度は、周りにお花を飾ってみよっか」

ゼツカの提案に少女はうなずいた。

三人で手分けして花を探し始めた。さすがに花壇から抜いてくるとはせず、遊歩道の端や石段の割れ目に咲いた小さな花を集めてきた。

キツカが花壇のそばでうずくまったまま帰ってこなくなった。

ゼツカと少女が様子を見に行くと、キツカが何かを指差した。

死んだアゲハチョウが土の上に横たわっていた。

「埋めてあげよう」ゼツカがぼつりと言った。

「うん……」キツカが力なく答えた。

少女がいきなりしゃがみこみ、両手を組み合わせて祈りの言葉をつぶやき始めた。

「お星さま、お星さま。きれいに輝くお星さま。あたしの祈りをかなえてください」少女は少し考えてから続けた。「お星さま、このチョウチョをもう一回元気にしてあげてください。きれいに飛ぶところをあたしたちに見せてください。お願いします」

ゼツカとキツカはあつげにとられて少女を見つめていた。

「何してるの？」キツカが訊ねた。

「お星さまにお願いしたの。このチョウチョがもう一回飛べますようにって」少女はこともなげに答えた。

「でも、このチョウチョ死んでるじゃん」ゼツカが言った。

「大丈夫。お星さまはかなえてくれるの」

ゼツカとキツカは思わず空を見上げた。

「ほら！」

少女の声を聞いて目を落とした二人は見た。

土の上に寝てびくりともしなかったアゲハチョウの羽が垂直に立ち上がっていた。

「うっそー」ゼツカは呆然とささやいた。

三人が見守るうちに、チョウは羽を試運転のようになうごめかし、やがて羽ばたきを強めて静々と飛び上がった。

チョウは舞い散る枯葉を逆回転させたような動きで高度を上げていく。もはや一度は死んだチョウだとは誰も信じないだろう。

少女はにっこり笑って、空に向かって手を振った。

アテナは驚きで息をするのも忘れていた。

背後の女も息を呑んで絶句した気配が伝わってきた。

やはり『お星さま』は少女の頭の中にしか存在しない。少女の願いをかなえているのは少女自身だ。

NUDEもプロウジョブも大変な勘違いをしていた。少女の能力は、祈りで敵を排除するなどというレベルではない。

自分の願いを祈りでかなえる力なのだ。

命を奪うことも、命を与えることも、祈りさえすれば自分の思いのままに実現できる。あの少女は致命的な人間兵器などではなく、むしろ神に近い存在と言った方がいい。

少女の存在はこの世界そのものを根底から覆しかねない。

アテナは猛然と思考を回転させた。

少女をプロウジョブに渡すわけにはいかない。ゼノビアは少女の力を思うがままに利用するだろう。そのためなら少女を洗脳したり改造することも辞さ

ないはずだ。

では、NUDEが保護すれば。

ハンナはまだいい。もし日本政府が少女の能力を知ったらどうなるか。おそらくプロウジョブと同様に、自国の利益のため少女の能力を利用しつくすだろう。これだけの力を手に入れば、その誘惑に負けないでいられる勢力など存在しないはずだ。

いずれにせよ、今日の前にあるような、友達と砂場で一緒に遊ぶささやかな幸せは永遠に失われる。少女と母親は引き離され、二度と一緒に暮らせないだろう。

では、これほどの巨大な力を自由にしておいてかまわないのか。彼女が邪まな意図をもって祈りを利用するようになったら、世界全体が破壊しかねない。

アテナは砂場の少女を見やった。少女はゼツカたちと砂の城に沢山の花を飾り付ける作業に熱中していた。自分の祈りが周囲に何をもちがらしているか、想像したこともないだろう。自分の力が何人もの命を抹殺したことに気づいていないだろう。

アテナは耳の後ろに手をやり、骨伝導通信機をつまんだ。

「アテナ、何を……！」

ハンナの制止を無視して、アテナは通信機を指で押し潰した。

アテナは前を向いたまま背後の女に言った。「プロウジョブが手を引いてくれるなら、NUDEもあの子には手を出さない。絶対に。だから、あの子をこのままそつとしておいて」

返事はなかった。アテナが重ねて説こうとした時、背後の女は口を開いた。

「……それはNUDEの意志ではありませんね」女が答えた。「あなた個人が何を言ったところで、私たちがそれを真に受けるいわれはありません」

予想された答えだった。アテナはずっと手に持ったままだったジュースをベンチに置き、意を決して

振り向いた。

背後の女は息が届きそうなほどアテナの近くにいた。

彼女は厚いフード付きのマントをまとい、マスクで隠された顔から瞳の無い鉛玉のような両目がのぞいている。露出した滑らかな腹部には、大きな禍々しいサソリのタトゥーが入っていた。

女の正体は確かにプロウジョブのレディ・デステインガーだった。

アテナは今日初めてステインガーの顔を正面から見据えた。

「この私がアテナは一言一言区切るように言った。子供に関わることで、口から出まかせを言うと思う？」

ステインガーは表情のない瞳でアテナをじっと見つめていた。アテナも決して目をそらさずステインガーを見返した。

「私とあなたは、あの子の本当の力をこの目で見て知った。あの子が敵としても味方としてもどれほど危険か、よくわかったはずよ」アテナは必死で畳みかけた。「NUDEには必ず約束を守らせる。どんな手を使っても納得させてみせる。だから、あなたもプロウジョブを説得して。お願い」

ステインガーは長い間沈黙していた。その間も、少女たちがはしやぐ声が小さく聞こえてくる。

「……そして、あの子のために優しい世界を作り上げる、と？」今度はステインガーの声に棘は感じられなかった。「ここで私たちが見逃したところで、結局あの子は世界を滅ぼすかもしれませんよ。そんな賭けをする意味があるのですか？」

「……意味はあるわ」アテナの声に迷いはなかった。「子供には自由に育つ権利がある。その結果を引き受けるのは大人の義務よ」

ステインガーの瞳の中に、かすかに揺らめくものがあった。それは諦念と、憐れみと、もしかすると

……嫉妬。

ステインガーは次の言葉を発しなかった。

砂の城は完成した。

ディズニールランドのシンデレラ城並みとはいかないが、それなりの高さの尖塔が上に伸び、いかにも欧米のおとぎ話に登場しそうな雰囲気を十分に醸し出せていた。

城の周囲には手で掘った濠が巡らされ、小さなバケツで汲んできた水で満たされている。

そして城全体を彩る花、花、花。まさにディズニール映画のラストシーンのような華やかさだった。

「やったー！」少女が万歳した。

「できたー！」ゼツカが拍手した。

「すっごーい！」キツカが目を丸くした。

少女がゼツカたちの手をとった。

「ありがとう、ゼツカちゃん、キツカちゃん」

ゼツカが不意に身体を固くして耳に手を当てた。

「あつ、ステインガー様！」

キツカが笑顔が凍りついた。

「はい、キツカも一緒にいます……えっ、任務終了、ですか？でも、ステインガー様と待ち合わせって……」

ゼツカが話している間、キツカはどうしようどうしようとうと右往左往していた。少女は狼狽する二人を呆然と眺めている。

「はい……はい、了解しました。すぐに帰投します！」

ゼツカは通信を終えるため息をついた。

「キツカ、ステインガー様が任務は終わったから帰って来いって」

「え、終わってたって、まだ何もしてないのに……」

げている少女に向き直った。

「ごめんね、急に用事が終わって……じゃない、用事ができたんで帰らなきゃならなくなつたの」

「えー、せつかく仲良しになれたのに……」少女は顔をしかめ、ゼツカとキツカの手を握った。「もう少しくらいいいでしょ、ねえ」

ステインガー様から帰投命令が出たからには、一刻も早く帰らないとまた怒られてしまう。なんとかうまくさよならできないかと思つた時、少女の表情が変わった。

「あ、お母さん来た！」少女がゼツカたちの背後を指さした。

ゼツカたちが振り向くと、地味な服装でやや疲れた表情をした女性が広場に入ってくるところだった。

少女が母親なのだろう。

少女の注意が母親にそれたのを見計らって、ゼツカとキツカは少女から後ずさって離れた。

「あたしたちも楽しかったよ。また会おうね」ゼツカはそう言って手を振った。キツカも笑顔でうなずく。

少女も笑って手を振り返した。

「一緒にお城作ってくれてありがとう！」少女は言った。「お返しに、お姉ちゃんたちが幸せになりますようにって、お星さまに祈ってあげるね！」

ゼツカとキツカはもう一度手を振って少女に背を向け、手をつないで走り去った。

少女はさっそく母親に新しい友達のことを報告し始めた。

陽光は完全に木々に隠れ、夕闇が東から迫りつつあった。

少女の親子は既に立ち去り、ステインガーは音もなく姿を消した。

最後まで公園に残っていたアテナは、一人きりでベンチに座ってずっと考え込んでいた。

少女はゼッカと最初に出会った時、「新しい友達
がほしい」と星に祈ったと言っていた。その後、
ゼッカが少女にコンタクトしたのは偶然だったのだ
ろうか。

もしかしたら。

この公園で起こったことの全てが、少女の祈りに
よって最初から方向づけられていたとしたら。少女
の祈りの実現のために、この場にいた全員が駒とし
て動かされていたのではないか。

今日の出来事は、一体どんな祈りがもたらしたの
だろうか。

その問いに答えられる者はこの地上にはいなかった。

完

UNCANNY EIGHTH WONDER

THE AGE OF ATHENA



Gemma

「ねえ、本当にやるの？」

「やるつたらやる！」

不安げにささやくリサの言葉を一蹴して、クララは装置をかついだまま大股に実験室の中央へ進み出した。

「ぜーったいにママに認めさせるんだから！」

ドラム缶のまわりにバイクのエンジンをいくつも貼り付けたようなそれを、部屋中央に乱暴に据え付ける。太いケーブルをガチャガチャと不器用につなぐクララを、リサはしぶしぶながら手伝った。強化ガラスで隔てられた隣室から、キサラとジュンも心配げに見ている。

「やめた方がいいと思うけどなあ……」

「だって、アタマにこない!? あんな言い方ないじゃない! 私だって遊んでるわけじゃないつーの!」

ことの起こりは数週間前にさかのぼる。

母アテナから、エイスワンダーの八番目の力について教えられたクララは大興奮した。時間跳躍! そんな力があれば、どんな事件も犯罪も防げる。あんな失敗やこんな敗北も、過去に戻ってなかったことできる。

「絶対使いこなせるようになりたい!」

聞けば第八の力は、莫大なエネルギーにさらされた時に発動するという。そこでまずクララは、母アテナにワンダーヴィジョンを最大出力で浴びせてみてほしいと頼んで、アテナに怒られた。次に、プロウジョブ事件で知り合ったりベルタスとイナズマガールに力を借りに行き、アテナにまた怒られた。ヒーロー仲間に戻されてしまったため、社会科学見学で行ったことのある筑波の高エネルギー加速器研究機構のことを思い出し、施設を使わせてほしいと頼みこんで、アテナにまたまた怒られた。めげずに、今度はNUDE本部の地下にある動力炉区画に忍び込もうとして、アテナとハンナにめっちゃ怒ら

れた。

「時間や歴史は、人が好きにいいじっていいものじゃないの! そんなこともわからないうちは、第八の力なんて十年早い!」

「あーんなに怒ることないって思わない? 自分だってその力のおかげで助かったのにさ!」

だがもちろん、クララは諦めなかった。ヒーローは諦めることなど知らないのだ。リサ達のツテをたどって、万能科学研究所の荒野博士に頼み込み、試作中だった小型プロトン・リアクターを強引に借り出してきた。

「これならきつと大丈夫よねー。私が初めて時間を越えた時もこれのせいだったんだし、相性いいはずよ、絶対!」

「こういうのに相性とかあるのかな……」

「何度もやんわりと止めようとしたリサ達だが、言っただけでクララではない。逆になし崩しに手伝う羽目になり、こうして装置のセッティングまでしてやってあげている。」

「電源来たよー。多分これで動くんじゃないかな」

同じ立場のはずのジュンはわりと呑気というか、無責任にクララの背中を押している。キサラはすっかり諦めて傍観モードに入っており、頼りになるのは自分だけだ。リサは深々とため息をついた。

「これ本当に大丈夫なの? またみんな消えちゃったりしないでしょうね」

「本物よりずっと出力が小さいって荒野さん言ってたし、たぶん平気だよ。そもそも、ビーム出す目玉ついてないじゃない」

「たぶんってねえ……」

そうこうするうちに、起動準備はすべて終わってしまった。気は進まないながらも、リサも隣の観測室へ移る。実験室内にはクララと装置だけが残った。《クララ、じゃあ行くよー?》

「やっちゃってー!」

強化ガラスの向こうでジュンがコンソールを操作すると、クララの前にある機械がすかかに振動し、下手なバイオリンのような甲高い音を立て始める。クララは装置に意識を集中し、じっと待った。両手を広げ、こめかみのあたりに力を込める。別に意味があつてやっっているわけではなく、気分の問題だ。

一分経ち、二分経っても、何事も起こらない。クララはだんだん不安になってきた。強化ガラスの向こうにちらりと目をやると、ジュンが手ぶりで、今が最大出力だと言っている。ふたたび装置に目を戻すが、依然として何も起こらない。荒野博士は、五分以上連続で動かしてはいけないと言っていた。これでもダメなら、次は何を試せばいいのだろう。クララが頭の中で次のアテを物色し始めた時、装置の真上の空間で何かがゆらめいた。

「あ……!」

最初、陽炎のようだったそれはしだいに広がり、渦を巻いて色を強めていく。虹色に黒を混ぜたような、形容しがたい色合いになって、装置の上一メートルくらいの所で回転しながら不安定にゆらゆらと漂いはじめた。大きさは小さいが間違いなく、プロトン・リアクターとの戦いの時に見たあれと同じものだ。

「みんなほら、見て見て! できたよ、できた!」

観測室の三人も、そろって口をぽかんと開けている。クララは手を振って、

「それじゃ、行ってくるね!」

「二ええ!?」

ガラスの向こうで三人が一斉に声を上げた。リサが慌ててマイクに飛びつく。

「ちよつとクララ、マジなの? どこに通じてるのかもわかんないんだよ?」
「平気、平気! 何とかなるって!」
明るく笑ってクララはふわりと宙に浮くと、肩幅

ほどしかなないその渦巻きへ頭から飛び込んだ。実験室へ通じるドアのロックを解除し、リサ達が飛び込んだ時にはもう、室内には静かに唸りを上げるリアクターの他には何もなかった。

目を開けると、廃墟が広がっていた。

「……あれ？」

一瞬、夢を見ていたのだろうかと思った。ぼんやりと周囲を見回しながら、記憶をつなぎ合わせる。そうだ、プロトン・リアクターを使って、時間跳躍によく成功したのだ。喜びと同時に、疑問がこみ上げてきた。

「いつなんだろ、ここ……」

あらためて周囲を見回す。傾き、崩れ、欠け落ちたビル群と道路、砂埃の舞う空。視界には赤茶色と灰色しか入ってこない。そこかしこに散らばる看板に日本語が見えるので、日本なのは間違いないが、クララは今までこんな場所にきた記憶はない。

そういえば、どの時間に行きたいかについて、まったく考えていなかったことに今更ながらクララは思い至った。プロウジョブのリアクターと戦った時と同じで、何も考えなくても適当にふさわしい時間に飛ばされるのだと思っていた。しかし何かの間違いでずつと昔、たとえば第二次世界大戦とか、関東大震災とかの頃だったらどうしよう。今更ながら不安になり、立ち上がって体中をなで回してみる。スーツは少し汚れているが、どこも傷はないようだ。パワーも問題なく使える、と、軽く宙に浮かんでみて確認した。

そのまま十メートルばかり上昇すると、瓦礫の山の向こうに、ゆるやかにカーブする大きな川が見えた。灰色に淀み、どちらに向かって流れているのかもわからないような川だが、そのカーブの形に見覚えがある。川沿いに積み重なっている崩れた壁のよ

うなものが、高速道路の残骸だと気がつくくと、クララは唐突に理解した。

「ここ……もしかして、浅草？」

「いかにもここは浅草だが、一体何の用だ、小娘」
鋭い声にクララが下を見ると、黒い修道服風のレオタードに身を包み、巨大な宝鎧を肩に担いだ長身の女が一人、瓦礫の上に立っていた。

「シスター・ペロシテイ！ これ、一体何なの？」

「訊いているのはこちらだ、娘。人の名を気安く呼ぶでないわ」

横柄な口調にムツとしたものの、クララはとりあえずシスターのそばに降下する。今が一体いつなのか、知るのが先決だ。しかし近くで見ると、シスター・ペロシテイの格好はこんなに露出度が高かったのだろうか。なんだか鎧のデザインも凶悪になっている気がするが、いつの間にもモデルチェンジしたのだろうか。

「私よ、エイスワンダー。ねえ、変なこと聞くけど、今年って何年？ なんて浅草がこんなになっちゃったの？」

「エイスワンダーだと？」

シスター・ペロシテイはぼかんとして、それからクツクツと含み笑いを始めた。

「そうか、そうか。お前はエイスワンダーか」

「見たらわかるでしょ！ さつきから変よ、シスター」

「うむ、よくわかった」なおも笑いながら、シスターは聖鎧ジャッジメントランスを肩から下ろす。

「では死ぬね！」

いきなり繰り出された鎧を避けることができたのは多分にラッキッキーのおかげである。クララは慌てて空中へ飛び上がった。

「何するの!？」

「口答えせず死ぬと言った!？」

シスターがすかさず聖鎧を両手で構えなおすと、

十字架型の先端から青白い雷光がほとばしる。ケープを切り裂かれてふらついたクララの隙を逃さず、驚くべき跳躍力でクララのいる上空まで跳び上がり、ランスの柄でクララを地上へ叩き落とそうとするのを慌ててかわした。

「えっ、えっ？ 何がどうなってるの、これ!？」

それは確かに、生真面目で融通の利かないシスター・ペロシテイはクララとあまり仲のいい方ではないが、いきなりこんな殺意に満ちた攻撃を受けるほど敵対していたことはない。やつぱり、自分のことを誰も知らないくらい昔に来てしまったのだろうか。「ちよつと待ってよ！ 聞いてっば！」

「痴れ者の言に貸す耳などないわ！ そうれ天罰観面!？」

何条もの雷光がクララの全身をかすめる。必死でよけるうち、クララは段々腹が立ってきた。ただでもわけのわからない状況に放り込まれて混乱しているのに、この仕打ちはあるまじりではないか。いやそれ以前に、過去とか現在とかの問題ではなく、このシスターは何かが変だ。

雷光をかわして、一瞬でシスター・ペロシテイの眼前に肉薄する。聖なる力を授かったベテランヒロインとはいえ、純粹な身体能力ならクララの方が上だ。ジャッジメントランスをつかみ、シスターごと持ち上げて瓦礫の山の向こうへ放り投げる。

「ちよつと人の話を聞きなさいよ!？」

地上に降り立ち、コンクリートの破片を蹴散らすようにしてツカツカとシスターに詰め寄る。鎧を支えに立ち上がろうとしたシスターがよろめき、思わず駆け寄ろうとしたクララの右腿に、熱い痛みが走った。

「……っ!？」

鎧に隠れたシスターの左手に、銀色に光る拳銃が握られていた。シスター・ペロシテイの最終兵器、シルバーレットだ。強力な退魔力を帯びた弾丸は、

エイズワンダーの鋼の肉体さえも傷つける。

だが、シルバールバレットは彼女達武装シスターの最後の切り札。それを使うのは自らの力が及ばなかった証として、彼女は使うことを恥じていたはずだ。仮にもヒーロー同士の戦いで、しかもピンチとすら呼べないこの程度の局面で持ち出すことなど有り得ない。クララは確信した。このシスターは本物の彼女ではない。彼女も、この世界自体も、何かがおかしい。

シスターが鎧を構え直し、笑みを浮かべて追ってくる。立ち上がろうとして、脚の痛みによるめいた。一瞬の空白をついて、鎧の穂先が滑り込むように視界に迫ってくる。

クララの目玉が貫かれる寸前、銀色の突風のようなものがシスターを襲い、瓦礫の上になぎ倒した。

「危ないところだったな、お嬢ちゃん。若い女の子が、そんな格好でフラフラするもんじゃないぜ」
クララはなにかば然と、目の前に立つ背中を見上げた。

浅黒い肌のがっしりした体躯。上半身を多う機械の鎧と、そこから伸びる四本のフレキシブルアーム。そして脂ぎった禿げ頭と、両目を覆う赤い透視グラス。

「あんた、ミスター・テナタクル！」

「おお、俺も最近わりと有名に……って、おわっ？」
クララの拳を、ミスター・テナタクルはすんでの所で避けた。「何しやがる！」

「うるさい、このスケベ男！ いま取り込み中だったので、こんな時に出てくるんじゃないわよ！」
「助けてもらつていて、なんて言い種だ。怪我人なんだから、ちったあ大人しくしてろよ」

言ってから、ミスター・テナタクルはシスターに向き直る。「さて、こんな辺鄙な所まで来てまたぞろ人間狩りか、シスター。罪なき人を苦しめちゃあい

けないって、あんたの神様は教えてないのかね」

「女帝陛下に忠誠を誓わぬ者はすべて罪人だ。逆逆者ふぜいが、人間並みの口をきくでないわ」

憎々しげに吐き捨てつつも、シスターが慎重に距離を取りつつあるのがクララにもわかった。先ほどまでの戦いに加え、触手の一撃で少なからぬダメージを負っているのだ。

攻撃してくるシスター・ペロシテイと、助けてくれた(らしい)ミスター・テナタクル。この状況で、一体どちらに味方すべきなのか、クララが決めかねているうちに、シスターはさつと瓦礫の向こうに姿を消してしまった。

「あ……！」

反射的に追おうとして、脚の痛みによるめく。その肩を、テナタクルのいかつい手が支えた。

「無理するな、お嬢ちゃん。誰だか知らんが、あいつらの敵なら俺達プロウジョブの仲間だ。アジトに案内してやるよ。一休みして、そんな悪趣味な服も脱いじまいな」

「エイズワンダーのコスチュームの何が悪趣味なのよ！」

「エイズワンダーのコスチュームが悪趣味でなかったら何だ！ 世界をこんなにした悪の親玉だろうが！」

「……??？」

「つまり、君は……とは別の世界から来た、と？ 俄には信じがたいが」

「私だって信じられないわよ。あなたとこんな風な話す日が来るなんて」

クララは目の前に座っている長身の女性……マザー・ゼノビアを緊張した面持ちで睨みつけた。豊かに波打つ黒髪に炎のような美貌、見ているだけで圧

倒される雄大なバストとヒップを黒革のマントで覆った姿は、確かにクララの知る大首領ゼノビアその人だ。ただし、あの時のような暗く猛々しい目つきのかわりに、穏やかで思慮深い眼差しがクララをまっすぐ見据えている。

プロウジョブのアジトは浅草からほど近く、東京駅の地下にあった。東京駅といっても地上部は例に漏れず瓦礫の山と化しており、赤煉瓦もドームも跡形もない。地下部分だけが原形を保ち、驚いたことに、そこには大勢の人々が暮らしていた。さらに驚いたことには、彼らのリーダーを務めているのが、プロウジョブの怪人達なのだ。

あちらではマッスルロックが太い腕に何人もの子供達を抱えて遊んでやっている。向こうのコンコーンではゼクトロンとセント・エルモが食事を配っている。元は売店だったらしい一画では、ゼツカとキツカ(とかいう名前だったと思う)がパラッツォを手伝って、棚の中の菓子を並べ替えている。

「プロウジョブの皆さんがいなかったら、私も息子も生きてはいませんでした。感謝してもしきれません」

手を合わせて伏し拝まんばかりに言う初老の婦人の言葉に嘘はない。使い慣れぬテレパシー能力まで使って確かめたのだ。

事ここに至っては、クララも認めざるを得なかった。ここは過去でも未来でもない。

クララはまったく別の世界に来てしまったのだ。「嘘でしょ……」クララは頭を抱えた。もともと、

時間跳躍した先のことを深く考えてはいなかったが、まったくの異世界に来てしまうというのはあまりにも想定外すぎる。おまけにこの世界ではよりにもよって、エイズワンダーが世界を支配する悪の女王だというのだ。

「それで、あなたとプロウジョブはそれと戦う正義の組織だつていうのね……？」

「私達だけではないさ。女帝の圧政に抵抗する心ある者達は大勢いる」

二十数年前、ハイバートピアの女王候補だったシア・アテナ・アリシアは、王位継承に必要な「八番目の力」に目覚めた直後、突如狂気にむしばまれた。ハイバートピアを滅ぼしたアテナは地上に降り、世界中の国家と、当時いた第一世代以前のヒーロー達を圧倒的な力で蹂躪し、マンハッタン島に己の王国を作った。以来現在に至るまで勢力圏を広げ続け、今では南北アメリカを中心に世界の半分以上が女帝の統治する「帝国」の属領となっている。

「信じられない……じゃあ例えば、この世界にスターゲイザーはいないの？」

「あの色魔か？ゼノビアの肉感的な唇が忌々しげにゆがんだ。「君の世界にも奴がいるとはな。我々の仲間がどれだけ悩まされたことか」

「色魔って……スターゲイザーが……」クララは呆然とする。「ミス・マーベリックは？」

「そういう名前の者は知らんな。ミスター・マーベラスなら、南米で戦うレジスタンスの英雄だが」

「サエグサ・インダストリーは」

「東アジアの反帝国活動をバックアップしてくれている多国籍企業だ。もう亡くなったが、サエグサ社長は立派な方だった」

「じゃあ、NUDEは？」

「女帝の下で世界を統括する権力組織だ。女帝を倒すには、まずNUDEの力を弱めなければならん」

「MIIXは？」

「NUDEの下部組織で、イギリスを支配している。元は国の諜報機関なのに女帝に忠誠を誓ったので、売国奴など呼ばれているな」

「じゃあじゃあ、サクリアアイスは？」

「MIIXと戦っているヒーローチームだ。我々と協力関係にある」

「信じられない……」クララはもう一度繰り返した。

「何もかもあべこべよ。こんな世界、狂ってる」
「私にとつては、君の言う世界の方が信じたいがな」ゼノビアは落ち着き払って答えた。

「遥クララと言ったな。君は、アテナの……？」
「娘よ」

「ざわり、と周囲の怪人——いや、ヒーロー達がどよめいた。

「あの女に娘とはな……そちらのアテナはどういう人物なのか、訊いてもいいかな？」

「どうって……普通よ。あ、いや、つまり母親としてはね。たぶん。お料理が上手で、口うるさくて、でも結構ずぼらで……そして無敵のエイズワンダーだわ。私の尊敬するママよ」

「尊敬か……」

ゼノビアは車椅子に背を預けて、遠くを見るような目つきで長々とため息をついた。この世界のゼノビアが、クララの知る彼女と大きく違う点はもう一つある。彼女は黒い玉座の代わりに、シンプルな車椅子に座っていた。

「エイズワンダーは……アテナは、昔あなたの親友、というか、仲間だったのよね？」

「ああ、そうだ。奴と私は共に、ハイバートピアの女王候補の一人だった。私は火山の事故でこんな体になってしまい、資格を失って引退したがな。そのおかげで皮肉にも、奴の虐殺から逃れることができた」

ゼノビアは形のいい唇をゆがめて、己の太ももをさすった。「運命なのだろうと思っている。私が生き残ったのも、子供達が皆、私の力の一部を継いで頼もしい超人に育ってくれたのも。女帝アテナを止めるのは、私の責任であり、使命なのだ」

静かだが決然とした表情を、クララはだまって見つめた。とにかく、一つだけ確かなことがある。目の前にいるこのゼノビアは、間違いなく信頼している人だ。

（まあ考えてみれば、私のお祖母ちゃんにあたる人なわけだし。本当はいい人で当たり前なんだよね）

とはいえ、これからどうすればいいのだろう。心情的なよりどころが一つできたおかげで、ようやくそれを考える理由が生まれた。女帝アテナに会って直談判したいという気持ちもあるが、話を聞くかぎりどうも、そう簡単に会えそうには思えない。そもそも、会えたところでそれはクララの母ではないのだ。助けてくれるはずもない。

「ねえ、私が元の世界に戻る方法って、わかる？」

「すまんが、見当もつかない」ゼノビアはあっさりと肩をすくめた。

「ドクター・レグザリアの言うには、君の次元振動数は確かに我々の世界のものとなっていて、その振動数を調べていけば、君がどの世界から来たか理論的にはわかるが……何年かかることか」

「ですよね……」クララはがっくりと肩を落とした。

「まあ、そう気を落とさないでくれ。君が正義の心を持つというのなら、我々は君を歓迎する。好きなだけいてくれて構わないし、元の世界に戻れるよう、できるかぎりのことはしよう。もっとも見ての通り、我々の余力はそれほど多くはないのだがな」

「ありがとう」今度はクララが、長いため息をついた。

「でも……私って、あなた達にとつてはヨソ者よね。信用できるかどうかだってわかんないでしょ。なんでそんな力になつてくれるの？」

「困っている者に力を貸すのは当然だ」こともなげにゼノビアは答えた。「それともう一つ、君が希望だからだ」

「希望？」

「君の話を聞いて思ったのだよ。どこかに、よりよい世界がある。人々が女帝に苦しめられていない世界がある。君の存在がその証拠だ。我々にそれを信

じさせてくれた君に、私は感謝している」

その世界で人々を苦しめていたのは他ならぬゼノピアなのだが……と言おうかクララは少し考えて、黙っていることにした。いずれにせよ、ここよりましな世界だというのは間違いないのだ。

「わかった。しばらく、ここにお世話になります。アテ……その……女帝との戦いにも、できるだけ力を貸すから」

「それは助かる。君の腕前のほどはテンタクルからも聞いている」

「私からもお礼を言います、クララさん」ゼノピアの傍らに控える、浅黒い肌の中東系美女が頭を下げた。見覚えのない顔だが、あらわな下腹に刺青されたセクシーな蠟の紋章で見当がつく。

「レディ・ステインガー、彼女はひとまず、サクリアイスに預かってもらってはどうかと思うのだがな」案の定、こちらの世界のレディ・デスステインガーだ。

「賛成です。あそこは少し前に欠員が出たままですし、時空跳躍の問題に関してもアマリスが専門でしょう。……それに、もしかしたら彼女が『運命の子』かもしれませんしね」

「あなたが異世界から来た子？ 私はアマリス。チーム・サクリアイスへようこそ」

アマリスと名乗った女性は、ゼノピアともステインガーともまたタイプの違う、あでやかに咲く花のような美人だった。「トップヒーローには女が多い」という法則だけは、この世界でも逆転していないようだ。彼女の能力、転移ゲートによって、クララは一瞬にしてイギリスのサクリアイス本部に来ていた。地下シェルターらしき施設を改造した、狭いが機能的なオフィスだ。

「時差があるから、最初は少し戸惑うかもしれないけど、すぐに慣れると思うわ。みんな日本語もしゃべれるし」

「はあ、ありがとうございます。……あの、『運命の子』って何なんですか？」

「目覚めればこの世を正してくれると言われている……まあ、予言ね。女帝が地上に現れて間もない頃、予言者（タイムブレット）が残したと伝わっているわ。私達のチームは、この予言の真相を突き止めるのが任務なの。いわば、情報部みたいなものね」

「予言……？」

「そう馬鹿にしたものでもないさ。その証拠に、僕たちの活動は何度も妨害を受けている。女帝も、ある程度の信憑性を認めているのさ」

ズシン、と重い機械音がして、機械でできた鎧のような巨人がクララの傍らに立った。

「よろしく、僕はテクノクライトだ。生身の体ではろくに動けないんでね、こんな姿で失礼するよ」

「よ、よろしく……」おっかなびっくり差し出した手を、意外に柔らかく機械の手が握り返してくれた。頭部を覆う強化アクリルの中に見える、おでこの広い顔には見覚えがある。「ねえ、あなたもしかして、チップ・ヘイルウッド？」

「僕を知ってるのかい？ ああもしかして、向こうの世界の僕とか？」

「うん、少しだけ。あつちでの君は、ブレインストームって名前だったけど」

「あんまり強そうじゃないな。テクノクライトの方がいいや」

器用に機械の肩をすくめるテクノクライトの後ろから、黒髪の少女が顔を出した。

「あたしはリディア・エルキン。コードネームはエレクトラ。リディアって呼んでね」

「キャンボールだ」リディアのさらに後ろから、精悍な顔つきの美少年がぶつきらぼろに挨拶をする。

クララの記憶とだいたい人相が違っているが、スピードイワンダーことケント・スピードマンで間違いないだろう。

「えっと、遥ク……クララ・ハルカです、よろしく。コードネームはエイズワンダーだけど、問題ありそうだから、とりあえずクララで」

「よろしく、クララ」アマリスが微笑む。「さて、早速で悪いけど任務があるわ。あなたも手伝って。人手はいくらあっても足りないの」

「慌てないで、こっちはです。毛布は十分ありますから」

「パンと缶詰は一人一個ずつです。取りに来れない人のいたら、近くの人が手を上げて下さい」

「歩ける人から五人ずつ、グループを組んでこっちへ来てね」

ケント州、カンタベリー。かつては大聖堂を擁し、今は見渡す限りの廢墟と化したこの都市の外れ、かつてはカンタベリー・イースト駅があったあたりに、不安げな顔をした一団の人々が力なくへたり込んでいた。年齢も性別も様々だが、皆一様に垢じみた服に身を包み、背中を丸め、疲れ切った顔をしている。まばらに生えたひげにパンくずをこびりつかせた老人がいる。感情のない目でたき火を眺めている少年がいる。か細い泣き声を上げる赤子をあやす力もなく、ただ漫然と胸に抱きかかえている女がいる。

彼らは皆、女帝の支配下にあるロンドンから逃れてきた人たちだ。新生チーム・サクリアイスの最初の仕事は、難民の救助だった。

「ここまで来れば、もう少しです。ドーバーまで行けば、大陸に渡る船が用意してありますからね」

テクノクライトがさつきから、廢材を使って組み上げた無蓋貨車のようなものと格闘している。やがて車体にスパークが走り、モーターが静かに唸りだした。クララはそれを壊さないようそっと持ち上げ

て、線路の上に置く。

「苦勞様、クララ」アマリスが水を持ってきてくれた。札を言つて受け取り、一口飲む。

「情報部っていうからスパイみたいなことしてるのかと思つたら、違ふんですね」

「そういうこともするわよ。でも、困っている人がいる時は別」

「この人達、アマリスさんのゲートでいつべんに運ばないんですか？」

「そんなに長時間開けておけないわ」アマリスは苦笑した。「それに、あれは通るのも結構消耗するでしょ」

確かに、最初にイギリスに来た時も、蒸し暑い中で息を止めていたような、独特の疲労感があった。病人やお年寄りにあれを通過させるのは厳しいだろう。

リディアが誘導するにしたがつて、一言も発さずに貨車に乗り込んでいく人の列を、クララは眺める。

「この人たちみんな、エイズワンダーの被害者なんですわね……」

この世界の実情が、少しずつまた否応なく、クララの脳裏にも染み渡ってきた。認めたくはないが、この世界では確かに、エイズワンダーは「悪」なのだ。

「クララが気に病むことないよ。それより急ごう、いつ奴らが来てもおかしくないんだから」エレクトラが肩を叩く。

「奴らって？」

「旧英国情報部、M I Xさ」二台目の貨車にとりかかっていたテクノクラートが後を引きとる。「あの『リライ』のいる所……と言つても君は知らないか」

「いや、リライは知ってるけど……え、あれ。リライ？ そういえば、彼女はあのチームにいないんだ？」

M I Xのエース、リライ・トゥリガー。日本に研

修に来た時に、一度だけ会つたことがある。あまり

愛想のない少女だったが、ケント達から大事にされているようだった。M I Xとサクリファイイスの立場

(と名前) が入れ替わっているこの世界なら、彼女も当然こっち側にいるべきなのだが。

「あんなのが俺達のチームにいてたまるか。何言つてんだ、お前」

偵察から返ってきたキャノンボールが、汗を拭きながら吐き捨てるように言う。「あいつらは狂人の集まりだ。人間をバラバラのバラかなんかみたいにい

じくり回して、強い超人を作ろうとしてやがる。リライはその集大成の化け物さ」

「落ち着きなよ、キャノンボール」テクノクラートが声をかけた。「ごめん、リライ。僕らはみんな、元々M I Xの実験体だったんだ。ある人たちに助けてもらつて、今のチームを作つただけだ。今でも連中のことになると、ちよつと冷静じゃいられなくてね」

「そうなんだ。ごめん」クララは素直に謝つた。「助けてもらつたつて、やつぱりプロウジョブに？」

「いや。俺達を助けてくれたヒーローは、もういない」キャノンボールの横顔がいつそう険しくなつた。「自分の命を犠牲にして、俺たちを生き延びさせてくれた。ハイボルテージ、ムーンフェイス、ナーガ、ドウムズ・サンデー……俺達は彼らの遺志を継がなきゃいけない。だから俺達のチーム名は(サクリファイイス)なんだ」

「では、その名の通り犠牲になるがいい。女帝陛下の世界の礎に」

突如、頭上から氷のような声が降つてきた。その場に

いる全員が一斉に空を見上げる。月光を背にして、何も

ない空中に、半透明の円盤が浮いている。その上に、五人の人影が立っていた。いま喋つたのは、その中央にいる黒髪の男だ。猛禽と爬虫類を合わせたような、人の心の感じられない目を

している。

「コマンダー・ジェイソン……！」

アマリスが絞り出すように言つた。エレクトラとテクノクラートがすぐさま難民を誘導して避難させ、残りの三人が彼らと円盤のあいだを遮る位置に展開する。

「どうしたコマンダー、人数が少ないな。俺がこの間ぶつとばしたブラスターとミストレルはそんなに重傷だったかよ」キャノンボールがふてぶてしく空をねめ上げる。

「ピンピンしているとも。お前達ごときに、フルメンパーでかかる必要はないというだけだ」

ジェイソンが指を鳴らすと、背後に控えていた三人が力場から飛び降りてくる。一人目の巨漢はテクノクラートが空中で迎え撃ち、二人目のサングラスの男はエレクトラとエナジーサージの撃ち合いを始めた。三人目の眼鏡の女は背中のフライトユニットとマシンライフルで、キャノンボールと空中戦を演じる。誰に加勢をしたものか、クララが逡巡しているうちに、

「お前はあの新顔を片付けるんだ。できるな、リライ」

「はい、パパ」

四人目……ジェイソンの腰にすがるようにしていた少女が、クララめがけて飛び降りてきた。

「えっ、リライ？」

クララは呆気にとられて、落下してくる少女を見つめる。クララの記憶にあるリライは灰色がかったブラチナブロードの髪をツインテールに結んだ、華奢な少女だった。今日の前

に迫っている少女の髪は黒っぽいブルネットのショートで、体つきも年頃の割にはかなりグラママーだ。顔も整つてはいるが、マイル系だったリライに比べて、どっちかというところ、思っているうちに、その顔がぶわつと膨らんだ。

と、思っているうちに、その顔がぶわつと膨らんだ。

と、思っているうちに、その顔がぶわつと膨らんだ。

と、思っているうちに、その顔がぶわつと膨らんだ。

と、思っているうちに、その顔がぶわつと膨らんだ。

と、思っているうちに、その顔がぶわつと膨らんだ。

と、思っているうちに、その顔がぶわつと膨らんだ。

と、思っているうちに、その顔がぶわつと膨らんだ。

顔だけではない。腕が、胸が、腹が、下半身が、風船を膨らますようにみるみる膨張していく。髪が逆立ち、背中のあたりまで続くたてがみになる。左右のこめかみから雄牛に似た角が生え、牙が伸び、鼻から下がり出してくて、クララの目の前に着地したのはゴリラと牛を掛け合わせたような、二階建ての家ほどもある怪物だった。

「何これ？ これがリリイ？」

当惑している間もなく、巨大な拳が飛んでくる。

咄嗟に両腕でガードしたものの、十メートル以上も吹っ飛ばされた。ダメージはないが、飛んでいく背後には逃げ遅れた難民の一团がいる。やばい、と思つた瞬間クララの体は闇に包まれ、次の瞬間、垂直に地面に叩きつけられた。

「そう、あれがM.I.Xの切り札、リリイ・グレンデルよ。あなたの世界ではそんなに違つたの？」

アマリスのゲートで極短距離ワープを行い、水平に飛ばされるのを垂直落下に変えたのだ。急激な方向転換で目眩を覚えつつも、クララは立ち上がる。

二撃目が迫ってくる。とっさにバック転でかわし、三発目のパンチの腕を捕らえてグレンデルの巨体を投げ飛ばす。その隙にアマリスはもう一度ゲートを開き、いまだ空中にいるジェイソンに挑みかかってくる。この場はクララに任せられた形だ。そうとなれば、相手が誰であろうと気にしてはいられない。

クララは考えるのをやめ、起き上がろうとする巨体の鼻面に、全力で拳をたたき込んだ。いやな音がして鼻血が吹き出るが、それ以外には大したダメージもないまま、怪物が起き上がってくる。

「上等だわ。グレンデルだかヘンゼルだか知らないけど、このエイズワンダーを舐めるんじゃないわよ！」

「しかし、君すごいね」

テクノクラート……チップが頭部のキヤノビーを開けて、汗まみれの顔をぬぐつた。「グレンデルは僕たち全員でかかっても、痛み分けに持ち込むのがやっとなんだ。あいつと一対一でやりあえるのなんて、マザー・ゼノビアとミスター・マーベラスくらいだと思つてたよ」

「あはは……ありがと」

乱戦にはなつたが、その間に難民の半数以上は逃がすことができた。もつとも、三台用意した貨車のうち二台までが壊されてしまったので、移動のための別ルートを考えねばならず、その手配にほとんど朝までかかった。全員汗と埃まみれ、おまけに寝不足で目が真っ赤だ。

加えて、クララの頭は疑問でいっぱいだった。あれがこの世界のリリイなのだろうか。だとしたら、クララの知っているリリイはどこへ行ったのだろう。「シャワー先使うよ。クララ、いこ」リディアが上着を脱ぎ捨てながらクララに声をかける。

「待つて、もうちょっと」

グレンデルとの格闘中からまつてしまった髪をほどくのに苦労するクララの目が、壁に貼られた一枚の写真の上にとまつた。

「……？」

髪をいじる手を止め、近づいてしげしげとその写真を見る。それはサクリアの集合写真だった。アマリスを中央に、四人の少年少女が笑顔で肩を組んでいる。ケント、チップ、リディア、そしてもう一人。

「ね、ちょっと！」クララは近くにいたケントをを捕まえ、壁の写真を指した。「この子、誰？」

「何だよ、急に」当惑げなケントの顔が、クララの指の先を見てぎゅゅとしかめられる。「この子は……」

「ちよつと、何やってんの！」

駆け戻ってきたリディアが、血相を変えてクララの肩を引つ張つた。そのまま引きずるようにして、シャワールームへ連れていく。更衣室に入つてからようやく向き直り、クララの鼻先に指を突きつけた。「あのね！……つてまあ、知らないなら仕方ないか……」

「ああ、と息をついて、リディアはシャツのボタンに手をかけた。「シャワー浴びましょ。中で話したげるから」

「あの写真の子はね、アルストロメリア。コードネームはファイアリングハンマー」さびの浮いた金属製のシャワーヘッドから出てくるぬるい湯を浴びながら、リディアは教えてくれた。「まえに戦死した、私達の仲間よ。ケントのガールフレンドだったの」

「あ……ごめん」

しゅんとなったクララに、リディアが隣のブースからシャンプーを放つてくれる。「まあ知らなかつたんだし、仕方ないよ。でも、彼女がどうかしたの？」

「うん」髪を泡立てながら、クララはもう一度、写真の少女……アルストロメリアの顔を思い浮かべた。

「リリイにそっくりなの」

写真の中の少女、アルストロメリアはリリイに……リリイ・トゥリガーにうり二つだったのだ。違いと云えば、ブラチナプロンドのリリイに対し、アルストロメリアは黒髪だということくらいで、あとは顔立ちも背格好も、彼女の記憶にあるリリイと完全に一致する。

「リリイ？ 全然似てないよ！」隣のブースから驚いたような、憤慨したような声が帰ってきた。

「そうじゃないの、私の知ってる、というか、私の世界のね」手櫛ですきながら、シャンプーを洗い流す。その間に慎重に言葉を探して、クララは自分の知るリリイと、この世界のリリイのことを説明した。

「……つまり、リリイ・グレンデルと別に、クララ

の知ってるリリイがどつかにいるかもしれない、その子がアルにそっくり……？」リディアの声は困惑していた。「ごめん、全然意味わかんない」

「うん……あたしもわかんなくなってきた」話しながら、曖昧なことがあまりにも多すぎるのにクララも否応なく気づいた。何か意味があるような気がするが、どういう意味があるのか皆目わからない。「こういう時は、チップに聞いてみよ」

「最初に挨拶した時、君言ったよね。君の知ってる僕らとコードネームが違うって」

クララの説明をだまって聞き終えたチップは、ま

ずそう言った。

「あ……うん」

「君の世界じゃ、その『リリイ』も僕達のチームにいたんだろ？ だったら、この世界では別の名前で呼ばれてるのかもしれない」

「それだったら、アルがクララの言うリリイだったんじゃないの？」リディアが言う。

「アルだとは限らないよ」チップは首を振り、金属の指先で眼鏡を直す。「昔、彼女が言っていたの覚えてないかい？ アルは元々、誰かのクローンとして生まれたんだって」

「ああ、確かに言っていた」ケントは少し辛そうな顔をしながらも、すぐにチップの話を手付けてくれた。

「自分は『代用品』なんだって言っていたよ。たまに落ち込んだ時なんか」

「彼女のオリジナル、というか、クローン元について聞いたこと、あるかい？」チップが重ねて問う。

「あんまり話したがらなかったから……」ケントは頭を掻き掻き、天井の隅を見上げるような仕草をして記憶をたどった。「めちゃくちゃ強力な超人で、『能力者の王』って呼ばれていた奴だと聞いたことがある。アルのブースター能力も凄かったけど、あれ

よりもっと上だったらいい。それで、結局NUDEにもM.I.Xにも扱いきれなくて、どっかに幽閉されたとか」

「どこに？ 場所は知らないの？」

「さあ、そこまでは……たぶん、アルも知らなかったんじゃないか」

首をひねるケントの横で、チップは猛烈な勢いでキーを叩いていた。

「今の話で、ちょっと思い出したことがある」手を休めずにチップが言う。「何年前か前、対超人テロ用の新兵器がイギリスに運び込まれたって噂があったんだ」

「新兵器？」

「うん。そして、それは本当は兵器じゃなく、超人だった……って説がある」チップの操作につれて、いくつもの新聞記事のようなものが画面に次々と開く。

「当時、まだイギリスは帝国の勢力範囲じゃなかったからね。対帝国用の戦力として、そういう名目で密入国したか、でなきや亡命してきたんだろう。でも、その後すぐに例のロンドン大空襲があって、イギリスはあつという間に併呑されちゃった」

「じゃあその時に、その新兵器だか超人だかもM.I.Xの手に落ちた？」

「そう。でもその後のヨーロッパ攻勢で、それらしい兵器や能力者が動員された記録はない」チップは一瞬だけキーを叩く手を止めて振り返り向いた。「連中にも扱いきれなかったってことなら、辻褄が合うよね」

「いくらなんでも、それだけで……」

「もう一つある」チップの金属の指がタッチパネルをすべると、一枚の地図が画面に出た。「当時、その新兵器が運び込まれた可能性が一番高い場所っていうのが、ここなんだ」

他の三人の顔色が変わる。クララは眉根を寄せて

画面に目を近づけた。「なんて読むの？ アベリー……」

「アベリストウイス人類進化研究所。僕らが昔育てられていた場所で、今のM.I.X本部だ」

「つまり、その『リリイ』が『運命の子』かもしれない、と？」

報告を聞いたアマリスの第一声は冷淡だった。「根拠に乏しいと言わざるを得ませんね。あやふやな噂から発想を広げすぎです」

「それはわかっています」チップが食い下がる。「でも、このタイミングでクララが来たのは、僕には偶然だとは思えない。彼女の世界と僕らの世界の違いがそこにあるなら、検証する価値があると思います」

「あたしも同感です」リディアも手を上げる。

「俺もです」驚いたことに、ケントまでが加勢してくれた。「アルはずっと、自分がクローンなのを気にしていた。そのことに意味があるなら、突き止めてやりたい」

アマリスは長いこと目を閉じたまま黙っていた。それから顔を上げる。「アルストロメリアのオリジナル体については、私も気にかけていました。M.I.X本部に幽閉されているという噂も聞いたことはありましたが、場所が場所なので手が出せなかった。でも」

アマリスはクララの方へ向き直る。「クララ、貴方の力があれば、可能かもしれない」

「えっ、私？」

「悔しいけどな」ケントが両手を挙げて降参の仕草をする。「あんたのパワーはケタ違いだ。テナタクルのタコ親父が絶賛してた理由がよくわかったよ。そんな格好してるだけのことはあるぜ」

「あはは……ありがと」

「クララ」アマリスがクララの目の前にやってきて、肩に手を置いた。「来たばかりで、貴女には厳し

い戦いをさせることになってしまいかもしれない。それでも、私達に力を貸してくれて？」

「もちろんです」クララは迷わずうなずいた。アマリスもうなずき返し、他の三人に向き直る。

「これより私達は、M I X本部への突入作戦を敢行します」

グレートブリテン島の南西部はかつてウェールズと呼ばれ、英連邦を構成する国の一つだった。今、国としてのウェールズは存在しない。帝国の統治下ではあらゆる人種、民族、国籍に意味はなく、万民は等しく女帝の奴隷であるからだ。女帝の支配は皮肉なことに、何世紀も続く民族紛争・国家紛争のいくつかを解決した。

そのウェールズの西端、アイリッシュ海に面した長い弧状の海岸のほぼ中央に、研究都市アベリストウイスは位置している。市の中心を外れて少し内陸に入った森林地帯の一面に、コンクリートで作った直方体のような飾り気のない建物が数棟かたまっていた。一見すると変哲のない研究所か何かに見えるが、巡回する警備員は拳銃ではなくサブマシンガンを携帯している。

その警備員が両腕を広げ、あくびをするような仕草をしたかと思うと、そのまま首が真後ろにねじれた。声も立てずに崩れ落ちた警備員の体の下から、にじみ出るように漆黒の男が現れる。男——ザ・リフレックスが手を振ると、そばの空間に黒いゲートが開き、クララ、サクリファイイス、そしてマザー・ゼノビアとブロウジョブ本部のヒーロー達が続々と姿を現した。

「ここが限界です。建物の中にはアンチハイパスベース・フィールドが張られていて、ゲートを開けません」大人数用のゲートを開いたアマリスの声

には疲労の色が濃い。「それにしても、マザー自らこちらにおいてになるとは。日本の方はいいのですか」

「疲れさせてすまん、アマリス」マザー・ゼノビアは日本で見たのとは違う、見るからに頑丈そうな浮遊式の車椅子に腰掛けている。「昨晚、皇居で人工転移ゲート反応があった」

「それは……！」アマリスが顔を上げる。

「この戦力が増強されたと見てよからう」ゼノビアは車椅子のまま前に出て、建物の壁に手を当てた。

「いい兆候でもある。奴らが警戒しているということとは、それだけお前の説の信憑性が高いということだ。ここが勝負所かもしれないぞ」

ゼノビアぐつと力を込めると、耐爆コンクリート製の壁が、内部の鋼板ごと紙のようにちぎれて吹き飛ぶ。たちまち鳴り響く警報の中、ゼノビアを先頭にブロウジョブ、サクリファイイスの一行は建物内に突入した。

「中、意外と普通ね」

廊下を走りながら、クララが独りごちる。数ブロックおきに道をふさぐ隔壁と、思い出したように壁や天井から湧いてくるレーザー銃や機関砲だけで、武装兵の一人も出てこない。クララの世界のNUDE本部の方がよほど警備が厳重だ。

「地上部はほとんどタミミみたいなものの。重要な施設はほとんど地下にあるんだよ」クララと並んで走るエレクトラが言う。横の壁にずっと手を当てたまま走っており、時折その指先から小さな火花が上がるのは、基地のコンピュータシステムに侵入をかけているのだから。

「よし、エレベータを一つ押さえた。三ブロック先、右ね」

「OK！」

だが、次のブロックで、一行は停止を余儀なくされた。隔壁の前に、見覚えのある面々が立ちふさがっていたからだ。

「昨日の今日でここへ来るとは大した度胸だ。いよいよ死にたくなつたか、失敗作ども」コマンダー・ジェインソンが氷のような目で睨みつけてくる。キャノンボールが前に出て、負けじと火のような目で睨み返した。

「逆だよ、とどめを刺してきたのさ」

ジェインソンが鼻で笑って指を鳴らすと、この前はいなかった短髪の男が両腕を振りかざす。一瞬で通路が炎に包まれ、火炎の波に乗って他の五人が襲いかかってきた。

「クララ、マザー、ここは俺達が！」

キャノンボールが叫んで飛び出す。テクノクラトが、小型の通信端末をクララに投げ渡すと後を追った。

「みんなを先導して、迂回路を通過して地下へ行つて。ルートはそこに」

「でも、大丈夫なの？」

「テクノクラトの読みが当たったからね」エレクトラがクララの肩を叩く。「自分たちの基地の中じや、無差別に暴れ回るグレンデルは出せないのよ。あいつさえいなきや、負けやしない」

言ってリディアも炎の中に消える。言われてみれば、さつき見た六人の中に「リイ」はいなかった。振り返ると、アマリスと目が合う。彼女が小さくうなずいて、クララは脇道へ飛び込んだ。ゼノビアと部下達が後を追う。

エレベータはすぐに見つかった。箱はどこかのフロアで緊急停止していたが、扉をぶち破ってシャフトを直接降下する。最下層まで下りて扉を開けた途端、雷撃が飛んできた。

「せっかく一度は見逃してやったものを、懲りない小娘だ！ 今度こそ天罰を喰らうがいいわ！」

「またあんななの、もう！」

シスター・ペロシテイの鎧をかわしたところへ、緑色の拳が飛んできた。猛々しい笑みを浮かべるマ

ツシブガールを、飛び出したマッスルロックが押さえ込む。よく見れば他にもちらほらと、見覚えのある顔ぶれが並んでいる。どれもクララの知っているのより人相が悪かったり、コスチュームが違ったりする。広くはない通路は、たちまち大乱戦になった。端末はまだ下をさしている。このエレベータで下りられるより、さらに下の階層があるらしい。

「クララ、お前は行け。我らはここで戦う」

「どういふ技を使ったのか、車椅子のままではシスター・ペロシテイを投げ飛ばしてマザー・ゼノビアが言った。「おそろく、ここが奴らの主防衛線だろう。ここを過ぎれば大した妨害はないはずだ」

「でも！」

「ここまで来れば、偶然ではない」両手を振って突風を起こし、スターフェアリーのスターシュリケンを吹き飛ばす。「お前と『リリイ』のどちらか、あるいは両方が『運命の子』だ。お前とその子が出会えば何か起きる。それを後押しするのが我らの役目に違いない」

「……」

「行け！ お前はエイスワンダーだろう！ 第八の力の名を持つのなら、己の使命を間違えるな！」

その叱咤でクララの背筋が伸びた。乱戦の中に隙を見つけ、床を思い切り殴りつける。コンクリートが陥没し、ぼっかり開いた巨大な穴へ、クララは飛び込んだ。長い金髪が消えていくのを見送って、ゼノビアは息をつく。その背中を一条の熱線が襲った。マントをはらい、ゼノビアは向き直る。「やはりお前も来ていたか」

「知っていてここに残ったのなら、大した度胸ね」戦塵の中から、ぬめるような声が答える。

「クララの話が本当ならば……」ゼノビアがスイッチを操作すると、重い軋みとともに車椅子が変形していく。装甲板が組み替えられ、モーターが尻の後ろに格納されて、車椅子は無骨な二本の脚になった。

立ち上がったゼノビアはファイティングスタイルをとる。「母と娘を戦わせるなどという残酷なことはしたくないのでな」

「あら、気にすることなんてないのに」真つ赤な唇が、蛇のような笑みを形作った。

「どうせ戦いになどならないわ。相手が貴女でも同じことだけだ」

ゼノビアの言った通り、下のフロアでは大した抵抗に遭わなかった。というよりも、人の気配自体がほとんどない。端末の示すアイコンに向かって、無人の廊下を駆けていくと、ほどなくひととき巨大な扉の前に出た。

映画でよく見る金庫室の扉に似た、大きな円形のハンドルがついている。両手でつかんで力任せに引っ張ると、メリメリと音を立ててドア全体がゆがんだ。その隙間から体をねじ込むようにして、クララは中に入った。

「何、ここ……」

扉の向こうは天井の高い、真つ暗な空間だった。学校の講堂か、空になった倉庫のようだ。広々としたコンクリートの床の中央に、四角い柱が突き出ている。近づくとそれは柱ではなく、巨大な石の箱だとわかった。正面に扉らしき溝があり、それを封じるように全体に鎖が巻かれている。箱の底部はセメントのようなもので床に固着していた。

どう見ても中に人を入れるような代物ではないが、思案している暇はない。こうしている間にも、頭上ではプロウジョブの面々が命がけて戦っているのだ。クララは箱を覆う鎖を力任せに引きちぎり、扉の合わせ目に指を突っ込むと、思い切り左右に押し開いた。背筋が波打ったと思うと、石の扉にヒビが入り、粉々に砕ける。

「何これ……？」

箱の中には黒いミノムシのような、異様な何かが、

天井から宙吊りにされていた。

しばらく凝視してから、クララはやつとそれが人の形をしていることに気づいた。全身を黒いベルト状の拘束具でミイラのように巻かれているのだ。サイズは小さく、細身の子供くらいしかない。クララの知るリリイと同じくらいしか。

「……リリイ？ あなたが、リリイ・トゥリガーなの？」

「リリイじゃあないね。だが（トゥリガー）には違いない」

ハスキーな声に、クララは振り向いた。たった今こじ開けた部屋の入り口を、人影が塞いでいる。逆光で顔は見えないが、波打つダークブロンドとレザーのスーツはクララがよく知る姿と同じだ。

「ハンナ司令！」

「へえ、あたしのことも知ってるんだ。感心、感心」小馬鹿にしたように言って、ハンナはゆっくりと部屋の中へ入ってきた。

「それは『世界を変える引き金』。そういう触れ込みで、私達に売られてきたの。結局、期待外れもいい所だったから、ここにしまっておくだけだね」

歩きながら、ハンナが眼帯を外し、クララの顔をまともに見据える。しばらくして、鼻白んだように視線をそらした。

「……ふうん。どこのドブネズミか知らないけど、陛下のコスチュームを真似てるのは伊達じゃないようだね」

いつか母から聞いた話を思い出す。彼女の左目には強力な催眠効果があるが、ハイパートピアの加護を持つエイスワンダーには効かないのだ。

「仕方ないな。行け、インテンス・スリー」

ハンナが手を上げると、その背後から三つの影が滑るように飛び出してきた。迎え撃とうとしたクララの手が、一瞬止まる。

「リサ！ ジュンちゃん、キサラ！」

それはクララのよく知る、三人の友達だった。だがその姿は、この世界で見た誰よりも変わり果てていた。

リサの明るい笑顔は、うつろな無表情に変わっている。キサラの美しい髪は、スキンヘッドに近いほど短く無骨に刈り込まれている。ジュンのメガネのかわりに、右目がレンズに置き換えられ、こめかみには機械が埋め込まれていた。

リサの爪がクララのスーツを切り裂く。爪の先には何かが移植されているらしく、重い金属質の輝きを放つ。

「やめて！ みんな、やめてよ！」彼女達はクララの知る三人ではない。そうわかっている、呼びかけずにはいられない。「この子達に何したのよ！」

「こいつらまで知ってるのか？ 大した情報網だな」ハンナが少し驚いた顔をする。「何の能もないくせに、成り上がり願望だけは強い、どこにでもいるガキどもだ。それをドクター荒野が改造して、コードネームまでくれてやったんだから、本人達もさぞ満足だろう」

「ふざけないでよ！」ジュンの銃から放たれた弾丸が腕に食い込む。突っ込んできたリサの爪をつかみ止めて、クララはキサラめがけて投げ飛ばした。ジュンの銃を睨みつけ、ワンダーヴィジョンで爆発させる。武器を失ってなおも掴みかかってくる三人をまとめて抱え込む。

ハンナが笑顔を消し、腰にさげた銃を抜いた。そのハンナをめがけて三人を投げつけ、クララは振り向いて箱の中に吊された「リリイ」の黒いベルトに手をかけた。

「そこまですておきなさい」

その途端、聞き覚えのある声が耳元でささやき、クララは壁に叩きつけられていた。

何が起きたのかわからない。コンクリートにめり込んだ体を引きはがし、部屋の中央へ視線を戻すと、

そこに彼女がいた。

赤いレオタードに金のライン。青というより黒に近い豪華なマント。髪は腰まで長く伸び、化粧もクララが知っているのよりだいぶ濃い、それでも間違えるはずはない。

エイズワンダー、遥アテナ。否、シア・アテナ・アリシア。

「私の真似をする妙な子供がいると聞いたから、わざわざ顔を見に来てあげたけれど。見かけ倒しもいいところね。こんな子に期待をかけて、彼女も哀れなこと」

ずだ袋のように無造作にぶら下げているのが、血まみれになったゼノビアの体だと気づいて、クララの全身がカッと熱くなった。壁を蹴り、超音速でアテナめがけて突進する。ジェット戦闘機が突っ込んでくるようなその突撃を、しかしアテナはハエを払うように片手で叩き落とす。

「がふっ！」

視界がぐらぐらする。歯を食いしばろうとすると、奥歯が一本フニャフニャしているのがわかった。碎けたのかもしれない。

「こんなもの、別にどうでもいいんだけどねえ」アテナは箱と、その中に吊されたリリイに目をやった。「でも、小さなリスクでもきちんと管理しておかないとね。人の上に立つには必要なことよ。そうでしょう？」

手にぶら下げたゼノビアを、倒れたままのクララの上に放り出し、二人まとめて蹴り飛ばす。路上の空き缶を蹴るような何気ない動作だったが、二人は空中をまっすぐに飛び、奥の壁に激突して落下した。

「ゼノビアさん！ 大丈夫？」

「もう少し、時間を稼げると思ったのだがな。……すまない」クララの体の上に横たわったまま、しわがれ声でゼノビアが答える。血を流してはいるが、命に別状はないようだ。

次元が違う。髪の毛一筋も乱さず、部屋の中央に悠然と立つアテナの姿に、クララは戦慄した。本物の……クララの母のアテナも強かったが、目の前の

この女とは根本的に違う。人を傷つけ、殺すことを楽しみ、そのためだけに己の力をふるい続けてきた女帝。パワーが、経験が、そして何より悪意の深さが、クララとは違いすぎる。おそらく自分が何をしても、この女に傷を付けることはできない。

「リスクと言えば、無能な部下もリスクには違いないわね。ねえ、ハンナ？」

二人を無視して、アテナは背後を振り返る。扉の近くで、インテンス・スリーとハンナがようやく立ち上がったところだった。

「汚名は雪ぎます、陛下」

ハンナが手を上げると、インテンス・スリーが再びクララに飛びかかってくる。ゼノビアをかばったクララは反応が遅れ、三人がかりで手足を押さえ込まれてしまった。全力を出せば簡単に振り払えるが、ここまでの戦いですでに傷だらけになったリサ達の顔を見て躊躇する。そのせいで、ハンナが銃に何かをセットしてこちらに向けたのに気づくのが遅れた。次の瞬間、ブラズマナバーム弾の閃光と炎が全身を焼いた。

手足にしがみついていたリサ達が、声も上げずに炭化する。ゼノビアのマントとスーツが一瞬で灰になり、むき出しの皮膚が赤く焼けただれていく。クララ自身のケープとコスチュームもほとんどが消し飛び、全身を鞭で打たれたような激痛が貫いた。

閃光が消えた時、そこに残っているのはゼノビアとクララの二人だけだった。真っ赤にただれたゼノビアの体が、ずるりとクララの上からすべり落ちる。クララは呆然とそれを見ていた。

「あ……」

「あら、まだ生きてるの。そのタフさだけは、私の真似をするだけあるわね」

アテナが悠然と歩み寄ってくる。それを見上げるクララの、なつかしい麻痺した頭の中に、ふつふつと一つの感情がわき起こってきた。

こんなのは間違っている。誰よりも純粋にヒーローに憧れていただけのリサ達が。得体の知れないよそ者だったクララを信じて受け入れてくれたゼノビアが、こんな風にされてしまうなんて、この世界は絶対に間違っている。

弾かれるように、クララは飛び出していた。まだ煙を上げている拳を、アテナの頬に叩き込む。アテナが初めて小さくよろめいた。

「リリイ！ リリイ・トゥリガー！ 聞いてるんですよ！」その勢いのままアテナの横を飛び過ぎ、クララは再び石の箱にとりついて叫ぶ。黒いベルトに手をかけて、チタン製の金具を次々に引きちぎった。怒りに顔を歪ませたアテナがクララを睨み据える。ワンダーヴィジョンが頭を直撃した。目がくらみ、髪が焦げるが、意に介さずクララは言葉が続ける。

「あなたのこと、あんまり知らないけど！ 私とあなたが会えば、何か起きるかもしれないの！ あなた、引き金（トゥリガー）なんでしょ！」

ミノムシのようなその姿が初めてピクン、と震えた。クララの全身を異様な感覚が包む。視界の隅に、アテナがマッハの速度で迫ってくるのが見える。

何者かに、自分と似ている自分よりも巨大な何者かに、つかみ返されているような感覚。クララはひるまず、ベルトを頭のとっぺんから爪先まで一気に引き裂いた。

中から出てきたのは、ブラチナ色の髪と白い肌の少女だった。

「リリイ……！」

少女の瞳が開き、まっすぐにクララを見つめる。その瞬間、クララは強烈な目眩に襲われた。自分の力が吸い出されていく。吸い出されて、空っぽになってもまだ止まらない。自分も知らないどこかの場

所に、ずっと眠っていた力が引きずり出される。目の奥から虹色の光があふれ出てくる。光が広がって全身を包み込み、アテナが、ハンナが、石の箱が、周囲の景色がみんな消えていく。

突然、叩きつけるように目の前が明るくなり、クララは空の上にあった。

青さが違う。咄嗟にそう感じた。ここは日本の空ではない。いや、地上の空ではない。

眼下に、緑に覆われた美しい島がある。その周囲には空。そして、そのはるか下に青い海。

それがエイズワンダーの故郷、空の楽園ハイパートピアであると、クララは直感した。

島の中央には雄大にそびえる火山がある。その火山の奥に、暗いオレンジ色に盛り上がる光が見えた。今にも噴火しようとしているのだ。エイズワンダーの視力はさらに、そのオレンジ色を背景にして、火口付近に浮かぶ小さな人影をとらえた。ひるがえる長い黒髪とたくましい肢体。服装こそ違っているが、それがゼノビアだとわかる。

それでは、ここは過去のハイパートピアなのだ。以前話聞いた「火山の事故」の瞬間にやってきたのである。

ゼノビアは、この時に重傷を負ったと言っていた。だがクララの世界のゼノビアは、この事件がきっかけで第八の力を覚醒させたはずだ。つまり、最初に何か狂ったのはこの時だということか。

それなら、何か起きるはずだ。クララは必死に周囲を見回す。クララの世界にはなかった何か、二人のゼノビアのどちらの話とも符合しない何かを探す。

だが、もともとこの時何があったか、それほど詳しく知らないのだ。何が異常かなど知りようがない。

焦るクララの目の前に、ふいに見覚えのあるゆらめきが現れた。

クララが注視する間にそれは回転をはじめ、虹色に黒を混ぜたような奇妙な色合いの渦巻きになる。その中心が輝きを増し、そこから弾丸のように飛び出してきたのは、

クララ自身だった。

「……？」

クララの眼前を、もう一人のクララが飛び過ぎていく。呆然とそれを見送った後、その進路がまっすぐ眼下の火口を指していると感じたクララは、慌てて後を追った。

「ちよつ、ちよつと、ちよつと待って！ ねえ、あなた誰!!」

「私!!」もう一人のクララはその時初めて、一人目の存在に気づいたらしい。さっきのクララとそっくり同じ表情で啞然としたが、それも一瞬のことだった。

「邪魔しないで。これから世界を救うんだから」

「待っててば!!」クララはもう一人の自分の腕をつかんで止めた。自分の二の腕を後ろからつかむというのは、実におかしな気分だ。「あなたもエイズワンダー? 私みたいに、別の世界から来たの?」

「別の世界? 何言ってるの?」もう一人のクララが怪訝な顔をする。「離してよ、あの女が逃げちゃうじゃない!」

「あの女って、ゼノビア?」

「いい加減にしてよ、あんた!」もう一人のクララがキレた。「そうよ、あれがゼノビアよ! プロウジヨブの首領ゼノビア! そこまで知ってるならわかるでしょ! 私はいいつをブチのめしに来たの!」

「え、いや、ええ?」

「離しなさいってば!」捕まれた腕をふりほどいてから、もう一人のクララはクララをじろじろを眺め回す。「あんた一体誰なの? 私のファン? でも、

この時代に私を知ってる人なんているわけないよね」

「えーっと……」あらためて考えると、自分の立場は相当ややこしい。別の並行世界から来て、しかもその過去に跳んで来たなどという話をどう説明すれば信じてもらえるだろうか。しどろもどろになっているクララを、もう一人のクララは胡散臭げに眺めていたが、突然ハッと何かに気づいた顔になった。

「あんた、もしかして、プロウジョブの作った偽者ね？ あいつらに言われて、私を邪魔しに来たんでしょ！」

「ええーっ!？」

「そうとわかれば！」もう一人のクララが思い切り蹴りを入れてきて、クララは数十メートルも吹っ飛ばされる。すぐさままきびすを返してゼノピアに向かうもう一人のクララへ、空中でブレーキをかけて必死に追いつがる。先行するクララが振り向きざまワンダーヴィジョンを浴びせてくるのをかわしてさらに肉迫する。二人のクララが空中で激突した。

「邪魔しないでよ、偽者！」

「偽者じゃないってば！」

つかみ合い、もみ合い、ワンダーヴィジョンを撃ち合う二人のクララ。ゼノピアまではまだ相当距離があり、向こうは火口のマグマに集中しているため、こちらにはまだ気づいていないようだ。間近でよく見ると、クララともう一人のクララにはいくつかわりがあった。クララのスーツで金色になっている部分、もう一人は銀色だ。スーツの赤と、ケーブの青の色合いが少し異なる。顔つきももう一人の方がちよっと陰がある気がするが、これはクララのひいき目かもしれない。ただしそのパワーは本物で、腕力もスピードもクララとまったくの互角だ。いや、向こうの方が少し上か。

ふとクララの脳裏に、ある考えがひらめいた。

「あなた、もしかして、この世界のクララ？ 未来

から来たのね？」

「他にどの世界のクララがいるのよ！」

それでは、つまり、この世界にも「本当は」クララがいたのだ。

それがどういふことか。学校では決して成績のいい方ではないクララの頭が猛回転し、ぞっとするような結論にたどり着いた。

「あいつを叩けば、プロウジョブは生まれえない！ ママも、みんなも、誰も苦労しなくてすむのよ！」

この世界の……銀のクララも、クララと同じ考えに至ったのだ。第八の力を使って時間をさかのぼり、過去の事件を解決してしまえばいいと。ただ、銀のクララの方が少し発想のスケールが大きく、かつ具体的だった。彼女は大首領ゼノピアが誕生した瞬間にさかのぼり、プロウジョブの誕生自体を止めようとしたのだ。

そして、その結果が、クララが見てきたあの世界。クララは、自分自身がやろうとしたことの結果を、ついさっきまで目にしていたのである。

「待って、待って待って、お願いだから！ それは駄目！ 歴史を変えちゃいけないの！」

「その手に乗るかあ！」

「違うんだってば！」クララは取っ組み合いながら、必死に説明した。クララが見てきた「現在」の世界のこと。ゼノピアが重傷を負った結果、アテナが、世界がどのようになってしまったかを。

「あのさ、百歩譲って、あんたの話が本当だったとしてよ」多少は攻撃の手を緩めてくれつつ、銀のクララが言う。

「それって、あんたの見てきた未来がそうだったってだけでしょ。私がこれから作る未来がそうなるのは限らないじゃない」

「だから、あなたの作る未来が、私が見てきた未来なんだって！」

「そんなこと、やってみなくちゃわからないでしょ。」

未来なんて人の手で変えられるんだから！」

ああ、希望に満ちて諦めが悪いというのが、敵に回すとこんなにタチの悪いものだったとは。クララの心に、ある種の絶望に似たものがずっしりとかかかってきた。自分を諫めたアテナの気持ちがよくわかった気がする。

だがクララの方だって、諦めるわけにはいかない。あの悲惨な未来を変えるためなら、何だってしよう。そう、たとえ自分自身をぶちのめすことであろうと。

「この、わからず屋っ！」

銀クララの腕をつかみ、力一杯放り投げる。その軌道を追って突進し、きりもみを続ける銀クララの横腹をめぐって跳び蹴りを見舞った。銀クララも負けじとワンダーヴィジョンで弾幕を張り、高速移動して四方八方から分身攻撃をかけてくる。クララがパンチの連打で応じると、軽自動車が何台も立て続けに衝突事故を起こしたような轟音がハイパートピアの空に響き渡った。

その音でさすがに気づいたのか、ゼノピアが上空を振り仰いで驚いた顔を浮かべている。だがもう構ってはいられない。銀クララの体重の乗ったパンチが腹にめりこむ。その腕を押さえこんで、空いた右拳で銀クララの横っ面を殴りつける。手四つで押し合ったまま、竜巻のように高速回転する。

渾身のパンチが何度目かに正面衝突した時、二人のちようど真ん中の空間がゆらめいた。光が虹色に渦を巻き、巨大な黒い銀河のようなものになる。

「これは……!!」

エイスワンダーの第八の力は、莫大なエネルギーにさらされた時発動する。自分と同等の力を持つ相手との戦いが、まさにその条件を満たしたのだ。

考えている暇はない。クララは咄嗟に銀クララを羽交い締めになると、その渦へ頭から飛び込んだ。

最後に見たのは、火口の縁で、驚いた顔でこちらを見ている若いゼノピアの顔だった。その顔が急速

にぼやけていく。目をこすろうとしたが、手がなかった。

「元気でね、お祖母ちゃん」

体が透きとおりに、実体を失う。腕の中でもがく銀クララの感触がなくなっていく。眠りに落ちるような、夢から覚めるような奇妙な感覚のまま、視界が閉ざされる。

そして気がつくときクララは再び、空の上にいる。

《……ラ！ クララ？ そこにいるの？ 返事して》

「へ、あ、ママ？」通信機からいきなり大音量で呼び出しが入り、クララは狼狽した。「ほんとのママ？ ちゃんとしたママ？」

《何言ってるの、この子は》アテナの呆れた声が返ってくる。安堵のあまり、全身の力が抜けて落下しそうになった。あわてて気を取り直し、あたりを見回す。眼下に川。左手には緑と赤の屋根で飾られた大通り。人でごった返して、何人かはこつちを見ている。右手に高速道路と、そのずっと向こうにスカイツリー。

間違いない、ここは浅草だ。クララの知っている浅草だ。

《何があったの？ 怪我してない？ 体は大丈夫？》

「うん、何ともない。元気元気」

《そう、よかった》通信機の向こうでアテナが息をつく。それから一気にドスのきいた声になり、《だつたら早く帰ってきなさい。話があります》

「はい。ごめんなさい。もう絶対、過去を変えようなんて言いません」

《あら、殊勝ね》アテナが少し驚いたように言った。ふと風が吹き、クララの長い金髪が風に踊った。

毛先が一房、焼け焦げているのが目に入る。銀クララのワンダーヴィジョンでやられたのだ。それとも、女帝アテナの方だったろうか。よく見れば、スーツも破れてほとんど全裸だ。クララはケープの残りで慌てて体をおおった。夢でも幻でもなく、あの世界は確かにあったのだ。

あの世界はどうなっただろう。クララは少し考えた。ゼノビアが怪我をしなかったのだから、この世界と同じようにヴィランとしてプロウジョブを作ったのだろうか。それとも、どちらの世界とも違う、また別の未来を進んだのだろうか。

いずれにせよ、知りようのないことだ。だが、きつと前より良くなったはずだ。そう信じたい。

「そうだ、リサちゃん達どうしてる？」

《三人ともハンナに絞られて、今始末書書いてるわ。言っとくけど、あなたは始末書くらいじゃ済まないからね》

「うん。ね、今日はママの春雨サラダ食べたい」

《は？ いいけど。急に何？》

「ふふふ」

焦げ付いたケープをひるがえし、両拳を前にかざす。クララは大きく上昇すると、見慣れた東京の景色をもう一度眺め渡し、まっすぐにNUDE本部を目指して飛んでいった。

完

**女神たちの最終決戦
遂に決着!!**



ウチのムスメに手を出すな!
~母娘ヒロイン奮闘す~

第3巻 7月10日発売!!

あとがき

●環望

どうも。「ウチのムスメに手を出すな！」公式同人誌2冊目です。
最近この漫画の本編と、十年続いたヴァンパイアバンドが同時に連載終了しまして（笑）。
一気に暇になっちゃったのを良い事に余す力の全てを注いでみたら35pも描いちゃいました（笑）。よく考えたらエロマンガ家時代でも1話に35Pも描いたことないよ！
今回のエピソードは連載中に思いついてメッチャテンションが上がったものの、終始やりっ放しの上、母子相姦やら乱交やら満載のネタをソフトHが売りの「ヤンコミ」に載せられる訳ねーじゃん、と描くのを断念したものです。その後クララが操られて基地を襲撃する、というコンセプトだけ生かして描かれたのが2巻収録の第8話、パペットマスター編です。
いや久々の全開エロマンガ、描いててスカッとしましたね！疲れたけど！
ちなみに作中登場する寄生生命体のデザインは「ウチムス」の生みの親（笑）のお一人であるブッチャーUさんが昔描かれた「おしりほじり虫」からインスパイアされた物です。
ブッチャーさんのエロ・クリーチャーデザインの秀逸さにはいつも脱帽ですよ。
夏コミには全開にも増してさらにボリュームアップした豪華執筆陣による150P超えの極厚同人誌「MILF of STEEL RETURNS」を発行予定です。お楽しみに～！！

●ティクラクラン

今回登場する少女の元ネタは、アメリカのSF作家アルフレッド・ベスターの短編小説です。昔のハヤカワSF文庫の短編集で読んで、ずっと印象に残っていました。どこかの街の片隅で人知れず巨大で危険な力が育っているというイメージはインパクトがありました。本編ではゼッカとキッカがかわいい割に幸薄い感じがしたので、二人に幸せな結末があってほしいとの願いを込めてメイン級の扱いにしました。

●Gemma

小学館プロダクション版『X-MEN』でアメコミに入門した私にとって、アメコミのクロスオーバーイベントのスケールのでかさを最初に思い知らせてくれたのが『エイジ・オブ・アポカリプス』でした。以来『レッド・サン』『シャッタードグラス』『フラッシュポイント』とif世界もの、それも善悪逆転世界ものに目がなくなって現在に至ります。そんな情念をしこたま詰め込んで書いてみました。ああ楽しかった。

Amazing EIGHTH WONDER

環屋

編集人 環望 (Twitterアカウント@tamakinozomu)

連絡先 tamakiya66@yahoo.co.jp

執筆者 環望 Gemma ティクラクラン

発行日 2015年6月21日

印刷所 POPLS

いわゆる診断メーカーによくある「何分以内に何人にRTされたらセララムのコスプレ姿のアテナを描きます」ってやつ。RT頂いて実際描いて見たはいいけれど、異様な程気恥ずかしくなって封印しちゃったラクガキw。
ちなみに俺の中でアテナの声は三石さんです。

